公同書簡　二

ペトロの手紙一　連続講解説教

始・二〇〇八年　一月　六日
至・二〇〇八年　七月二七日

辻　幸宏

本説教集は、二〇〇八年に大垣伝道所において説教を行い、説教要約としてまとめたものです。元来、このように説教集としてまとめる意思などはまったくなかったのですが、語った言葉に責任を持つことを考えた時、以前に語った言葉を隠しておくのではなく、公表し、読んでいただくことが必要かと思い、大宮教会小会の了承を得て、印刷する決断しました。

ペトロの手紙一は、公同書簡の二番目に位置し、今後順次、公同書簡の中から説教集を印刷していく予定にしています。

個人において聖書を読む時、本説教集を共に読んでいただければ幸いです。

なお、説教には日付けを入れておきました。時事問題等は現在とは異なった状況にあるものもあるからです。

既刊　公同書簡一　ヤコブの手紙

二〇二〇年九月

辻　幸宏

「神の御計画」　ペトロの手紙一　一章一～二節　二〇〇八年一月六日

Ⅰ．ペトロからの手紙

ペトロの手紙の書き出しは、パウロの手紙と同様、当時の手紙の定型の形を取ります。つまり、「〇〇から〇〇へ。恵みと平和があなたがたにあるように」です。

著者は、使徒ペトロです。「イエス・キリストの使徒」と名乗れるのは、主イエス・キリストから直接、その召しを受け、その働きに認められた一二使徒とパウロに限られます。そういう意味では、旧約時代の預言者・祭司・王、また新約時代の牧師・教師・長老・執事とは異なった、特別の召しを受けた働き人です。しかしペトロが手紙の著者であることに、疑義を唱える人々が後を絶ちません。ユダヤ人の漁師であったペトロが、流暢なギリシャ語を話し、書くことができたのか？　時代背景からしても、ペトロの時代とは合わないのではないか？　ペトロが手紙の宛先である小アジア地方との接点がないなどです。

ここでは、言葉の面のみ指摘します。一般に漁師は無学であると考えられ、外国語であるギリシャ語を語ることはできないと思われがちです。当時のユダヤはローマの属国で、ローマの監督・兵隊を初め様々な人々がユダヤにいました。彼らと交流を行い、生活を共有するためにギリシャ語を用いることを求められていました。そうした情況から、ペトロがヘブライ語のみならず、ギリシャ語も語り、執筆することもできたと言えます。また、シルワノが口述筆記したのであり（五章一二節）、彼が文体を整えたことも考えられます。

Ⅱ．選ばれている人たちへの手紙

さてペトロは、ポントス、ガラテヤ、カパドキア、アジア、ビティニアの各地の教会に手紙を書き送ります。場所に関しては聖書巻末八の地図で確認して下さい。小アジア地方です。それぞれの教会が、パウロか他の誰によって形成されたのかは分かりません。また、ペトロがそれらの教会とどの様な関係にあったかも分かりません。しかしペトロは、これらの教会の信徒たちが、苦しみを覚えつつ信仰生活を送っていたことを伝え聞いていたのは事実であり、ペトロは彼らに対する励ましの手紙を書いています。

「離散している」とはギリシャ語で「ディアスポラ」です。通常は「離散ユダヤ人」を指します。ユダヤ人はバビロン捕囚により国を追われて以来、各国に散らばっていたのです。しかしこの手紙は何も離散ユダヤ人のみに記されているのではありません。教会には、離散ユダヤ人もいれば、ローマの市民権を持った者もいれば、奴隷もいます。彼らの苦しみは異教社会における無理解と迫害であり、信仰の戦いが強いられました。つまりここでの「離散者」とは小さな教会に属するキリスト者たちのことで、時を超え場所は異なりますが、現在の私たちに語られている手紙でもあります。

またペトロは「仮住まい」とも語ります。キリスト者は地上の生涯、仮住まいです。パウロは「我らの国籍は天にあり」（フィリピ三章二一節）と語ります。創造主によって創造された被造物としての人間の本来あるべき最も祝福された場所は、この世ではなく神の国です。そして地上の生涯は、永遠の神の御国における生命に対して、仮住まいです。

この世における生活は、偶像や世の権力者との間に信仰の戦いを避けて通ることはできません。しかしこれはあくまでも仮住まいにおける生活であり、本来あるべき神の国における神からの祝福は約束されています。

Ⅲ．主のご計画

ペトロは続けて、「キリスト者は神に選ばれた人たちであり、父である神があらかじめ立てられたご計画に基づいて、“霊”によって聖なる者とされている」と語ります。私たちが神の国に入ることは、主なる神の永遠のご計画に定められており、そのご計画に基づいて、私たちはキリスト者となるように定められています。だからこそ、周囲の人々から信仰の故に迫害されたり後ろ指さされているキリスト者にとって、主のご計画が示されていることは慰めの言葉となります。それは神が定めて下さっているからこそ、この信仰が失われないように主によって保たれ、苦しみを乗り越えることができるからです。

さらにペトロは、「キリスト者となることは、キリストの十字架の血により、聖なる者とされていること」であると語ります。キリスト者となることは、キリストによる救いを

受け入れ信仰告白することが求められますが、洗礼を授かることにより、キリストの十字架により罪は贖われ、罪が償われ、聖なる者とされました。そして、さらに聖餐式の度に、主によって聖なる者とされていることを確認し、神の御国における永遠の生命を仰ぎ見つつ、希望に満たされ、この世における様々な労苦、艱難、迫害に対しても、戦い抜く力が与えられていくのです。この様に、主によって召されキリスト者とされている私たちは、主によって与えられる神の国の祝福を目指しつつ、この世にあっては様々な艱難の中にあっても、主によって支えられ、信仰生活を貫いていくことが許されています。

そして、ペトロは、こういう人たちこそが主からの恵みと平和が豊かに与えられるようにと主に祈りつつ、励ましの手紙を、各地に離散している教会に、そして私たちに対して書き送ろうとしています。

「主による希望」　ペトロの手紙一　一章三～五節　　二〇〇八年一月一三日

Ⅰ．三位一体なる神を誉め称える

ペトロは書き始めの挨拶で、主なる神のご計画に基づく救いの豊かさと、人々のことを思うペトロの愛を語ります。三～五節も同様のことが言えます。三節では主イエス・キリストの父である神が誉め称えられています。つまり主イエス・キリストには御父がおられます。つまり、日々私たちに働きかけてくださる聖霊を加え、三位一体の神を意識しています。御父は私たちの救いのすべてをご計画し、御子は永遠の御父から生まれ、御父の救いを十字架によって成就されました。そして今、私たちに聖霊が働いています。つまりペトロは、父なる神の賛美を、主イエス・キリストによって聖霊を通して語り、御父・御子・御霊なる三位一体からなる主なる神であることを告白します。私たちは今、この三位一体なる神を礼拝しているとの意識が重要です。イスラムの神でも、神道の神々でも、作ら

れた偶像でもなく、永遠からおられ、天地万物を無から創造し、すべてを統治しておられる、父・子・御霊の交わりの内に、私たちとの深い交わりの内にある神です。また三位一体の交わりに愛があるからこそ、被造物である私たちを思い、愛し、私たちの苦しみ・悲しみをも知り、共有し、私たちの祈りを聞き遂げて、助け出してくださる神でもあります。

Ⅱ．旧約における祝福と十字架に伴う新生

続けてペトロは、神が私たちにお与え下さっている憐れみの業を語ります（三節ｂ）。無限・永遠・不変の霊である主なる神だからこそ、私たちに命を与え、裁くこともおできになります。旧約聖書では、アブラハムが主によって選ばれて以来、嗣業の土地が与えられる事を繰り返し語ります。実際にアブラハムはウルからカナンまで導かれ、ヤコブの時代にエジプトに下りますが、四〇〇年後にモーセによって出エジプトを果たし、約束の土地に帰還します。さらにイスラエルの罪の故に捕囚の民とされ世界中にイスラエルは散りますが、それでも主はイスラエルを約束の地に帰還させて下さいます。これは、旧約の時代に永遠の生命が約束されていなかったのではなく、救い主キリストが来臨される準備をされていたのであり、彼らもメシアによる永遠の生命の希望に満たされていました。

旧約の民も、新約の時代のキリスト者も、誰一人、罪の刑罰なしに、永遠の生命は約束されていません。キリスト者にとって、キリストの十字架が徹底的に重要な意味を持ちます。しかしペトロはキリストの十字架を語りません。ペトロはキリストを三度も「知らない」と罪を犯したことがトラウマとなっていたからではありません。その証拠としてペトロは二章二四節、二章二一節、三章一八節、四章一節、四章一三節においてキリストの十字架に言及します。何よりも、この手紙を読んでいる教会のキリスト者たちが、今、信仰の故に苦しみ、信仰の戦いが強いられており、彼らに対する励まし、希望を伝えようとしています。

そしてペトロは、キリストの十字架に与ることを、別の表現「新たに生まれさせられた者（新生）」と語ります（参照・ヨハネ三章）。キリスト者はキリストの十字架に与るこ

とによって肉の体は死に、キリストにあって新しく生まれます。だからこそ主を信じる者は、滅び行く肉の体を棄て、キリストが復活を遂げられたように、肉体の死を遂げても復活の体が与えられ、永遠の生命が与えられる者とされています（四節）。

朽ちず、汚れず、しぼまない財産はすでに天国にあります。その中に、神によってキリスト者とされた者は入れられます。これはどういうことか。私たちはキリスト者とされ、朽ちない祝福に満たされていますが、なおも地上の歩みを続けています。地上の歩みは朽ち、汚れ、空しい財産に囲まれています。天における創造者であられる方からの永遠の生命とすべての祝福に与っている者が、なおも地上における朽ちていくものを追い求めていくのですか？　必然的に、生活は変化し、神の国を求めます。もちろんこれは金儲けを行わず、地位を求めず、世離れした生活をするのではありません。主が地上にお与え下さった数々の賜物を用いて生活します。ただそれらにおぼれないと言うことです。

Ⅲ．主の約束と私たちの姿勢

また、この神の国において与えられる汚れず、朽ちず、しぼまない財産は、地上のどれ程の富や権力によっても得ることのできない祝福があるからこそ、地上の生涯にあって、信仰の故に迫害を受けることに対しても忍耐し、それを乗り越える力が与えられます。主は地上の生涯において、苦しいけれども信仰を守ったら、天国における祝福をお与えくださるとは語りません。私たちに努力することを求めておられるのではなく、神の力が私たちを覆い、信仰から離れず誘惑に陥らないように、迫害の手から守って下さいます。

では、私たちはどうすればよいのでしょうか。私たちは主を信じることにより、すでにすべての罪は赦され、新生しています。しかし今なお地上における朽ちていくものの中にあり、私たち自身もなお罪人です。行い・言葉・心の中で、主の御前に罪を犯しています。この自らの弱さを認めることが第一です。その上で、私たちのすべてを知っておられる主にすべてを委ねることです。主は私たちの苦しみをすべて御覧になり、私たちを救いに導くほど愛していてくださるからこそ、主御自身も私たちの苦しみを担って下さいます。だ

からこそ、私たちは主に祈ることができます。主は私たちの祈りを聞き届けて下さいます。また、苦しみが続いたとしても、私たちを守り支えて下さり、天国における永遠の祝福をお与え下さいます。

天国における永遠の生命の祝福は約束されています。主の手元に、その契約書があり、私たちは神の国の住民になる住民登録はすでに行われています。私たちは今から聖餐式に与りますが、キリスト者はこの聖餐式において、新生し、神の国の永遠の生命と祝福にあることを確認します。それと同時に、まだ信仰告白をしていない子どもたちと求道中の方々は、自らの口で罪を告白し、主なる神によって救いが与えられ、永遠の生命に与るように、主は願っておられます。今すぐでなくても、主による救いを受け入れ、信仰を告白する日がもたらされることを、切に祈ります。

「試練を乗り越える」　ペトロの手紙一　一章六～七節　　二〇〇八年一月二〇日

Ⅰ．神による試練と神の救い

皆さまの中に、今試練の中、苦しみと闘っている人たちもあるでしょうが、ペトロが書き送りましたこの手紙を受け取った教会もまた、信仰の故に迫害されたり、身分の違いによって、多くの信徒たちが試練の中に置かれていました。そして主によって愛され、キリストを宣べ伝える者とされたペトロは、彼らの苦しみを共有しています。主なる神を信じてキリスト者になったからと言って、試練が無くなるわけではありません。そのため、ペトロは「すぐに試練を乗り越えられ、楽になる」様な楽観的なことは語りません。むしろ「今しばらくの間、いろいろな試練に悩まねばならないかもしれない」と語ります。「苦しみを取り除いて下さらない神など信じるに値しない」と思われる方もいるでしょう。しかし主を信じてクリスチャンになることは、この世的な御利益宗教ではありません。

ではなぜペトロは、夜寝ることもできないほど苦しみにあるキリスト者に対して「あなたがたは、心から喜んでいます」と語るのでしょうか。テキストの最初に「それゆえ」という言葉がありますが、この言葉が重要です。試練の中にあっても、心から喜ぶことができるのはなぜか。それは三～五節に答えが記されています。主なる神を信じて、イエス・キリストの復活に与ることにより、私たちもキリストにあって新たに生まれさせられ、復活の生命と永遠の生命の祝福に満たされているからです。そして永遠の生命が与えられる天国において、朽ちず、汚れず、しぼまない主からの財産をすべて受け継ぐ者とされています。それは、創造者でありすべての統治者である主なる神によって作られた被造物としての人間にとって、最も祝福された状態です。だからこそ主を信じ、この永遠の生命の祝福が与えられることによって、心からの喜びに満たされます。そして、この喜びは、今の苦しみ・試練にはるかに勝るものです。

ペトロはどれだけ苦しく喜べない情況にある人にも、「常に喜ばければならない」と語っているのではありません。人間的な弱さがあり、本当の苦しみにある時には、人は喜ぶことはできません。しかしそういう人でも、すべてを御支配しておられる主なる神による救いにあることを覚える時、心の奥底には平安があり、歯を食い縛り、試練を乗り越えていく力が与えられます。言い換えますと、すべてを支配し、今なお私たちと共におられ、私たちに力を与え続けておられる主なる神の存在がはっきりと示され、キリストの十字架による主の救いを全面的に受け入れる時、私たちは心の平安、心からの喜びがあり、苦しみの中・試練の中にあっても、それに耐え、乗り越える力が与えられます。

Ⅱ．試練によって精錬される私たち

では、私たちの苦しみも悲しみもすべてご存じである主は、なぜ、今すぐに私たちを苦しみから解放することをしてくださらないのでしょうか。それは私たちが罪人だからです。主は聖・義・真実な方であり、主によって私たちが救われ、神の子とされます。しかし私たちの現実は、行い・言葉・心において主の御前に罪とされることを毎日繰り返します。

こうした情況は、神の子として相応しくありません。そのため、主は神の子に相応しい者となるために、私たちに試練を与えられます。そのことをペトロは金の精錬を譬えに語ります。つまり私たちは神の子とされたのですが、なおも罪・汚れといった不純物が沢山混入しています。それを金が精錬によって不純物を取り除かれるように、罪を取り除くために精錬されていかなければならないのです。それが私たちに与えられた試練です。

しかし同時に主が私たちと共にいてくださるからこそ、どの様な試練に対しても、私たちは守られています（Ⅰコリント一〇章一三節）。そして試練を通して、罪が示され、悔い改めへと促され、主の御前に謙虚にさせられ、聖化されていきます。

Ⅲ．信仰の成長が与えられる試練

金が精錬される時、一度に二四金と呼ばれる純粋な金に精錬されるわけではありません。最初に鉱山から掘り出された鉱石は、多くの不純物が混入されており、最初に不純物のみが取り除かれます。次の精錬によって金属毎に分けられて行き、最後に金のみが残ります。さらに純粋な金を生成するためには、僅かな混入物を取り除くために精錬が繰り返される必要があります。そうして一八金、二四金、九九・九九九九九％の純金へと精錬されていきます。

私たちのこの世の歩みの中にあって、繰り返し繰り返し、苦しみと試練がもたらされるのも同じ事です。試練が繰り返されていく時、私たちは自分自身でなかなか成長しないと思いがちですが、それらの試練を繰り返す度に、主は私たちの信仰を強め、神の子に相応しい者へと日々成長させてくださいます。

私たちは苦しい時ほど、自分で何かをしなければならないと、もがいてしまいますが、そういう時ほど、興奮状態にあり冷静に判断する能力すら失い、その問題に適切に対処することができなくなります。しかし主は「心から喜びましょう」と呼びかけて下さり、そこに救いの確信があります。主が共にいて下さり支えていて下さいます。だからこそ、私たちは、苦しみの中にある時こそ、主の御前に立ち帰ることが求められています。

主の御前に立ち、主にすべてを委ね、主に祈り求めましょう。

「魂の救い」　ペトロの手紙一　一章八～九節　　二〇〇八年一月二七日

序．

私たちは、生活が順調に行っている時・嬉しい時には喜ぶことができるでしょうが、苦しい時・艱難にある時に、喜ぶことは難しいかと思います。しかし聖書は、私たちの生活がどれだけ苦しい時にも、私たちは主イエス・キリストへの信仰の故に永遠の生命が約束される祝福にあり、本当の喜びに満たされていると語ります。

Ⅰ．ペトロのキリストとの出会い

さてペトロは「あなたがたは、キリストを見たことがないのに愛している」（八節）と語ります。ペトロ自身は、生けるキリストと共に生活し、復活のキリストにも出会いました。私たちとの大きな違いです。しかしペトロはイエスを主と受け入れることができず、逮捕されたイエスのすぐそばで、イエスを「知らない」と三度語りました（ルカ二二章五四～六二節）。またキリストが復活された時も信じることができず、目で確認するために真っ先に飛び出して行きます（ルカ二四章一二節）。つまりペトロ自身、復活のキリストに出会わなければ信じることのできなかった一人であり、「復活の主イエスに出会い、この指を釘跡にいれてみなければ、決して信じない」と語っていたトマス（ヨハネ二〇章二五節）と同じです。

そうすれば「自分を棚に置いて」と言いたくなるでしょう。しかし、ペトロは物理的にキリストと出会ったばかりか、信仰の目をもって復活のキリストとの出会いもありました（ヨハネ二一章一五～一九節）。ペトロは復活の主イエスと出会い、罪が赦されていることを確認しました。そしてキリストの十字架の意味を理解したのです。この時、ペトロの

霊的な目、信仰が開かれたのです。ペトロは主イエスが自分の罪の赦しと救いの故に、十字架にお架かり下さったことを知り、主の愛を受け入れました。主イエスがペトロを愛していてくださるからこそ、ペトロも主イエスを愛し、主イエスを宣べ伝える者とされました。

Ⅱ．キリストとの出会い

では私たちがキリストを愛するとはどういう事でしょうか？　私たちがキリストを愛するとは、頭の中だけの概念や哲学であってはなりません。私たちがキリストと出会うとは、キリストの実存との出会いが必要です。もちろん私たちは直接目でキリストを見ることはできません。キリストは天におられ、聖霊を通して私たちと共におられます。私たちは今も生きて働くキリストがおられることのリアリティーが問われています。

復活の主イエスはペトロと出会い「ヨハネの子シモン、あなたはわたしを愛しているか」と三度も確認するほどペトロを愛されました（ヨハネ二一章）。ペトロはキリストのその愛を知り、受け入れたのです。それと同様に、キリストは天上にあって、私たち一人ひとりを愛して下さり、私たちのために執り成しの祈りを献げてくださいます。ペトロが罪を犯したにも関わらずキリストは赦して下さったように、私たちをも愛し、私たちの罪を赦してくださいます。

この目で見ることができないにも関わらず、天におけるキリストと聖霊を通して出会い、交わり、愛を確認することができる情況を、ペトロは「言葉では言い尽くせないすばらしい喜び」であると語ります。人間的な知識では理解しがたく、語り尽くすことのできない出来事が、聖霊の働きによって与えられています。ここに信仰が成立します。

Ⅲ．キリストに結ばれる

そして私たちは天におられるキリストと、聖霊を通して出会うことが求められます。それはまさしく、私たちがキリストの十字架と連なることです。キリストの一回限りの十字架により、キリストを信じる私たちの一生におけるすべての罪の償いが行われました。私

たちはキリストを主と信じて洗礼に授かりますが、その時、キリストの十字架との結びつきを確認し、キリストの十字架によって救われたことを確認しなければなりません。

だからこそ、主の晩餐において私たちは、パンを食することによりキリストの十字架で裂かれた体を、ワインを飲むことによりキリストの十字架で流された血を想起します。私たちの永遠の生命が、キリストの十字架と切っても切り離すことができないほど重要であるからこそ、私たちは聖餐式毎に、そのことを確認します。

さらに私たちがキリストの十字架に連なることは、キリストの復活による永遠の生命に与ることです。「あなたがたは信仰の実りとして魂の救いを受けているからです」（九節）。「魂」とは、概念的・抽象的になりがちですが、「生命」とも言い換えられます。「魂」と「体」と分けて「魂」のみを考えてはなりません。「魂の救い」とは、私たちの体全体の救いのことです。

だからこそ、私たちは、今、一時の苦難、迫害があり、苦しまなければならないとしても、それ以上に揺るがない永遠の生命の希望に満たされ、信仰の故に喜びに満たされて生きていくことができます。

「あなたがたの救い」　ペトロの手紙一　一章一〇～一二節　　二〇〇八年二月三日

Ⅰ．信仰に生きるとは

ペトロは一〇節の冒頭で「この救いについては」と語ります。三～九節において、生き生きとした希望を与える永遠の生命に関して語っています。救われながらも迫害や苦しみの中にあるキリスト者に対して、ペトロは、あなたたちはもう永遠の生命に生きていると語ります。それは地上における朽ちていくような財産ではなく、朽ちることなく、私たちにとって最も祝福されたものが永遠の生命によって与えられています。そのため、今、苦

しみの中にあったとしても、それは金が精錬される如くに私たち自身の罪が清められ、聖化されることであり、主は決して私たちを捨て置かれることはなく、本当にすばらしい喜びに満ちあふれさせてくださるとの約束をお与えくださいます。

私たちは、信じて救われることを考える時、まず自分や家族、そして周囲の友人を中心に考えてしまい、聖書に登場する人たちを自分たちと同じ目線で考えることはありません。しかしペトロは旧約の預言者に言及します。つまり主なる神が天地万物を創造されて最初の人アダムから数え、旧約の民、そしてイエス・キリストの弟子たち、新約の教会につながる者、さらにこれから救われる民も、同じ救いに導かれています。救いは、主による永遠の選びによるのであり、天地万物の創造の前に、主はすべての神の民を選ばれ、救われることをご計画されています。主が一方的に私たちに救いの契約書を作成し、それを執行して下さいます。従って、私たちに示されている永遠の生命の救いは、旧約の時代にも示されており、イエス・キリストによって始まったものではありません。

そのため救いは長い歴史の中に脈々と受け継がれてきており、救いを個人的なことと考えてはなりません。「キリスト教会など古くさい」との言われ方もします。しかし主なる神による救いに与ることは、たかだか一年・一〇年・一〇〇年といった短い次元で、生まれては消えていく薄っぺらいものではありません。主のご計画によって示される私たちの救いは、不変であり、非常に厚みをもったものです。そのため、私たち自身の信仰がたとえぐらついたとしても、主による救いが消え失せるような浅はかなものではありません。

Ⅱ．旧約の時代の救い

では、旧約の預言者たちについてペトロはどのように語っているでしょうか（一〇～一一節）。預言者たちは主からの御言葉を与り、イスラエルの民に預言を語りますが、それを語らしめたのはキリストの霊です。二〇〇〇年前にお生まれになられたキリストが、旧約の時代にお語りになります。それはどういうことか？父なる神の御子キリストは、永遠の神として存在されており、天地創造の時に言葉（ロゴス）を発せられる事により天地万

物を創造し、旧約の時代に預言者たちに主の預言をお語りになります。何も二〇〇〇年前に初めてお生まれになったのではありません。真の神であり、父なる神の御子であるキリスト御自身が、私たちを救うために真の人となられたのです（二性一人格）。そして人となられたキリストが、私たちの罪を背負って十字架にお架かり下さり、私たちの罪を贖って下さいました。

ロゴスであるキリストは旧約の預言者たちに何を語られたのか？　救いが与えられたため悔い改め、主を信じなさいということです。そのために、御子御自身が受肉し、十字架における苦難を担われ（詩編二二編、イザヤ五三章）、復活して栄光に入れられる（詩編二編、一一〇編）ことを預言されました。そのため彼らは救いをもたらしてくださる約束のメシアを待ち望みつつ、主の御前に悔い改めと信仰生活を送ります。

つまり、私たちが救いを考える場合、すでに二〇〇〇年前にお生まれになられ、十字架の苦難と復活の御業を成し遂げられたキリストを顧みるのですが、旧約の民にとってはキリストはまだ受肉されていないわけで、これから与えられる救い主を待ち望みつつ、自分たちの救いに希望を持っていました。そのため旧約の民は、救いをおぼろげにしか見えていませんでした。そのため主を礼拝するのも、預言・いけにえ・割礼・過越の子羊等、ユダヤ人の民に与えられたさまざまな予型と規定によって執行されるに留まりました（ウェストミンスター信仰告白第七章五節）。

しかし私たちには、すでにキリストの救いの御業が成し遂げらました。もう新しい啓示は必要なく、啓示の書は旧新約聖書によって示されています。またすでに罪の贖いがキリストによって成し遂げられているからこそ、一度洗礼に与れば良く、繰り返し生け贄を献げる必要はありません。

「キリストの再臨を待つ」　ペトロの手紙一　一章一三～一六節

二〇〇八年二月一〇日

Ⅰ．神の国の祝福に与る者として

ペトロは、キリストによって召されたキリスト者は、神の国における永遠の生命の祝福にあることを語ってきました（三～一二節）。神によって創造され、神の被造物である人間は、神の子として、永遠の生命に与ることが最大の祝福であり喜びです。

一方ペトロは「だから、いつでも心を引き締め、身を慎んで、イエス・キリストが現れるときに与えられる恵みを、ひたすら待ち望みなさい」（一三節）と語ります。永遠の生命の祝福と、どの様な関係があるのか？「心を引き締める」とは「心の腰に帯を締める」ことです。日本ではほとんど着られることがなくなりましたが、着物を着ると動き回ることができません。ですから働くために動こうとすれば、人々は着物の裾を上げ、裾を止めます。すると動くことができます。同様にキリスト者として生活する時も、いつでも動ける状態にすることが求められています。それは信仰故の誘惑があるからです。誘惑には、他人からもたらされる外的な誘惑と、私たち自身の問題である内的な誘惑があります。

第一の外的な誘惑は、迫害・虐げです。権力者は、キリスト者を虐げることがあります。そして背教を求めます。それは、権力者が従順な民を求めるからであり、正義を貫くために為政者に罪を告発するキリスト者を嫌います。このように権力に媚びずに主が示される正義を貫こうとすれば、私たちは常に心を引き締めておく必要があります。

第二に私たち自身の弱さから来る罪への誘惑があります。これは権力・富を得るための罪への誘惑と、世俗社会に流され、主が示される真理を次第に忘れ、結果として罪に誘い込まれる誘惑があります。今、インターネットを初めとして様々な娯楽・情報が世に満ちています。これらすべては一般恩恵の恵みとして主が私たちにお与え下さった恵みです。私たちはそれを賢く用いていくことが求められています。しかし一方、これらには様々な罪が潜み、サタンは誘惑を仕掛けて来ます。時間を奪い、生活を破壊し、生活費をむしば

みます。

だからこそペトロは「心を引き締めなさい」、「身を慎みなさい」と語ります。誘惑に誘われることなく、主の御前に自らの姿を照らし、自らの罪を顧み、主の御言葉に従うことが求められます。キリストは今、天に座しておられますが、最後の審判の時、再臨されます。この時にすべてのキリスト者は、神の御前での最後の審判において、無罪と宣告され、神の子としての永遠の生命の祝福が与えられます。キリストはすでに十字架の御業でサタンに勝利されましたが、神の国の完成はこの時を待たなければなりません。

Ⅱ．神の知識によって与えられる規範

次には一四～一五節を取り上げます。「無知」とは、神の知識・神の知恵に対する無知です。これは神のことを聞いたことがなく知らない無知もありますが、すでに神の言葉を聞き、聖書を知識として知っている者でも、この無知に該当する人がいます。神の真理を理解していない人で、律法学者やファリサイ人などがそれにあたります。彼らの旧約聖書の知識はすばらしいものです。彼らは聖書を教える教師であり、人々の罪に対する裁きも行っていました。しかし彼らは、神の真理・神の愛を全く理解できずにいました。また主イエスが十字架に架けられ死を遂げられるまでのペトロ自身や、復活の主イエスと出会う前、キリスト者を捕らえ迫害していたパウロも同様です。

本当ならば、キリスト者はすでにこの無知の状態が過去のものでなければなりません。しかし長い信仰生活から来る慣れから、あるいはペトロのように本当の意味での復活のキリストに出会っていないキリスト者もいます。

神の知識に対する無知である時、人には律法の規準はありません。もちろん国の法律は示されていますが、それを人々は押しつけられたものと受け止め、自分勝手な解釈を行います。彼らの規準は自分であり、自我です。そのため、人は世の欲望に溺れます。権力・金銭の欲望のままに生活を送り、隣人であり家族や友人すらも虐げ、傷つけてしまいます。

しかしキリストと出会い、罪の赦しと救いが示された時、生活は改められます。なぜな

らば、主はキリストの十字架の故にあなたの罪が赦されたと宣言し、救いをお示しになると同時に、律法という罪の規準を私たちにお与えくださるからです。律法（十戒）は、今までの生活における行い・言葉・心の罪を示し、悔い改めへと示すと同時に、キリスト者として生活する時の生活の指針となります。私たちは律法に従うことにより罪の誘惑から主によって守られます。つまり律法とは「守らねばならないもの」とのイメージがありますが違います。主の愛により律法により、私たちは守られています。そのためキリスト者は、主がお語りくださる御言葉に聞き続け、神の真の愛を知り、律法の意味をより深く知り、神の御前に従順にキリストに倣う生活することが求められています。

私たちが主の日毎に、主を礼拝するのは、もちろん主の求めですが、私たちがキリスト者として真の神を知り、律法を知る上でも、必要なことなのです。

「あなたがたは聖なる者となれ。わたしは聖なる者だからである」（一六節）。

「神を畏れる生活」　ペトロの手紙一　一章一七～一九節　　二〇〇八年二月一七日

Ⅰ．「恐れ」と「畏れ」

説教題を「神を畏れる生活」としました。これは、私たちが主なる神をどの様な方として信じているかという信仰の反映でもあります。

「おそれる」と語る時、通常「恐」が用いられます。そして「畏」は同義語とされています。しかし信仰を語る上では、「恐れ」と「畏れ」は使い分けた方がよいでしょう。その違いは何か？「恐れ」とは、権力や軍事など力におびえる、恐怖の状態にあることです。一方、信仰生活において主なる神を畏れることは、恐れおびえる生活ではありません。確かに、未信者、不信者にとっては、自らの生活により主による最後の審判を待たなければならず、恐ろしい神でかもしれません。主は人の行い・言葉・心の罪に応じて公平に裁か

れる方だからです（一七節）。しかし、裁きを主に責任を押しつけることはできません。しかし、主による救いに与るキリスト者は、そうした恐怖を持つ必要はありません。私たちは主によって与えられた信仰により、裁きの座における無罪が約束されています。本来ならば、私たちも自らの行いにおいては主の御前に裁かれる存在でした。主の裁きは公平だからです。しかし主は、主を信じる者に対して「私たちの父さん」と呼ぶことをお許し下さり、神の子どもとしてのすべての特権を、主は私たちにお与え下さいます。ウェストミンスター信仰告白　第一二章（子とすることについて）は、次のように告白します。

「一」「義とされた者たちすべてを、神は、その独り子イエス・キリストにおいて、また彼のゆえに、子とする恵みにあずかる者としてくださる。これによって彼らは、

［第一に］神の子たちの数に入れられて、神の子たちの自由と特権を享受し、

［第二に］神の御名をその上に記され、

［第三に］子とする霊を受け、

［第四に］恵みの御座に大胆に近づき、

［第五に］「アッバ、父よ」と呼ぶことができるようにされ、

［第六に］父によってされるように、神によって、憐れまれ、守られ、必要を満たされ、懲らしめられる。

しかし、決して捨て去られてしまうことはなく、かえって贖いの日のために証印され、永遠の救いの相続人として、もろもろの約束を受け継ぐ」。（松谷好明訳）

Ⅱ．キリストの贖いに与る者

主なる神に対する「恐れ」はどのようにして「畏れ」に替わるのでしょうか？私たちが主の御前に立派な行いを行った結果ではありません（参照・ローマ四章五節）。キリストの十字架の贖いによります（一八～一九節）。主による裁きを恐れて生きることはむなしい生活です。地上の生涯で、いくら素晴らしい功績を残した人、富や権力を手に入れた人でも、神に出会わず、主による裁きを待つ人生は空しいものです。富も、権力も、名声も、

墓場まで持って行くことはできません。しかし主なる神は、私たちを恐怖と空しい人生から贖って下さいました。「贖い」つまり、私たちは主によって買い取られ、神の所有物、神の子とされました。そのため金や銀のように朽ち果てるものから、永遠に生きる者とされました。主は私たちを、きずや汚れのない小羊であるキリストの十字架による尊い血によって贖ってくださいました。永遠から永遠に生きておられる神の御子キリストが、私たちの代価として支払われ、キリストは私たちの恐怖である刑罰を、十字架においてお受け下さいました。だからこそ、主を信じる者の恐怖は取り去られました。

Ⅲ．地上での仮住まいの時

だからこそ、人の行いに応じて公平に裁かれる神は、このキリストの贖いによって、私たちを無罪として、永遠の生命をお与えくださいます。そのためキリスト者にとって父なる神は、恐ろしい神ではなく、私たちを救いに導いてくださる愛と憐れみ深い神です。だからこそ、私たちは感謝の念を持って主に仕えていくものとされていくのであり、私たちは主を畏れ、畏敬し、敬うのです。

また、主なる神によって永遠の生命が約束されているからこそ、この世における生活がすべてではなくなります。この世においてでしか価値のない、富や権力、名声などを追い求める必要もなくなるからです。それがペトロの語る「地上での仮住まい」です。

つまり、この世はキリスト者にとって安住の地ではありません。永遠の生命をお与えくださる主を見上げつつ、畏れかしこんで生活する場です。そうした信仰生活を送ることは、同時に死に対する恐れを持ち、主なる神による裁きに対する恐れを持っている人たちに対しても、主を証しすることとなり、福音宣教の前進へとつながります。

二〇〇八年二月二四日

Ⅰ．主のご計画

ペトロは、「あなたがたは、……この地上に仮住まいする間、その方を畏れて生活すべきです」（一七節）と語ります。ここでペトロは三つ理由を語ります。第一に、主を信じるキリスト者には、公平な裁きを行う方を父と呼びかけることが許されており、裁きではなく救いが与えられています。第二に、キリストの貴い十字架の血による贖いの故です。

そして三つ目のことが今日取り上げます二〇～二一節で語られています。キリスト者に与えられている希望とは、なにも予想に基づく希望的な観測や楽観主義、感覚的なものではありません。主によって与えられる希望は、すでに決定されたことであり、それも主なる神により、裏切られることのない揺るぎないものです。つまりこの希望とは、主なる神による永遠のご計画に基づきます。

今、私たちが神を畏れて生活する理由を三つ語りましたが、それぞれがバラバラにあり、偶然に揃ったのではありません。主は、天地万物を創造される前に、すべてをご計画されました。この主のご計画の内に、キリスト者一人ひとりを召し上げ、神の子として生命の契約を結ばれています。また私たちを救うために、御子が人となられ、十字架の贖いを成し遂げてくださることも、神の計画に入れられています。主のご計画の内に、私たちの救いと祝福のすべてが含まれており、このことは非常に重要なことです。

しかし私たちの思いからすれば、主が計画を立てられても、中止や変更されることが有るのではないかと考えてしまいます。しかし天地万物を創造し、すべてを統治されておられる主なる神は、聖・義・真実な方であり、永遠（時間）・無限（空間）・不変（変化）の霊です。そのため、御自身が永遠の内にご計画されたことは、変更されることは決してあり得ず、主のご計画は必ず成就します。だからこそ、主がキリストの十字架の贖いの故に、キリスト者を救ってくださる約束により、私たちは平安に歩むことができます。

Ⅱ．預言と成就

主のご計画が不変であることを、私たちは聖書全体から確認することができます。旧約の時代、人は罪を犯し、主なる神から離れ、罪の故の死を逃れられなくなりました。しかし主は、イスラエルを立て、一方的な救いをお与えくださいます。イスラエルはなおも罪を繰り返しますが、主はその度にイスラエルに罪の悔い改めを求め、時には懲らしめて国を奪いながらも、なおイスラエルを救い続けてくださいました。

そして主の約束が不変であることは、出エジプトにおいても確認できます。主はアブラハムに四百年間奴隷として仕え、その後に助けられることを約束されます（創世一五章一三～一四節）。そして主は四〇〇年後、モーセを立て、イスラエルをエジプトの奴隷状態から救い出し、約束の地カナンに導き入れてくださいました。またバビロン捕囚から残りの民がエルサレムに帰還することによっても確認することができます。

そして主の約束が成し遂げられることは、メシア預言によって最高に達します。メシアは旧約の時代に約束され、キリストによって成就します。その中で私たちが着目すべきはキリストの十字架です。旧約のイスラエルの民は、罪の償いとして、動物の生け贄が求められました（レビ二二章）。そして主に献げられるべき生け贄は、傷のない、牛、羊、山羊の雄が求められます。イスラエルの民は繰り返し傷のない動物の生け贄を献げます。しかし彼らはその生け贄により、やがて与えられるメシアによる完全なる罪の贖いを信じたのです。そしてキリストは、きずや汚れのない小羊として、私たちの罪を背負うて、十字架にお架かりくださいました。

Ⅲ．「すでに」と「いまだ」

そしてキリストは、十字架における贖いを完成され、三日目に復活し、栄光のうちに天に昇られました。つまりすでに私たちの救いのためのキリストの御業は完成されました。そして今、キリストは天にあって、私たちのために執り成してくださり、神の宮である教会に導いてくださり、救いの道を歩ませてくださいます。私たちは救いの約束が示されています。この救いの約束は、キリストが十字架の死から復活を遂げられたように、主なる

神を信じ、キリストの十字架の御業を信じる者には、肉体の死を遂げたとしても、キリストが再臨された時、キリストと同じように復活の体が与えられ、神の御国に入れられ、永遠の生命が約束されています。

だからこそ、キリストの御業を受け入れキリスト者とされた者は、キリストによって主なる神の永遠のご計画を受け入れ、私たちに約束されている神の国における永遠の生命に至る救いを信じることができます。そして、私たちに与えられる救いの希望が揺るぎないものであるからこそ、私たちの信仰も揺るぎないものとなり、主に仕え、神を畏れた生活へと促されていきます。

「不変の愛」　ペトロの手紙一　一章二二～二五節　　二〇〇八年三月二日

Ⅰ．キリストに接ぎ木される者

私たちクリスチャンは外見上は未信者と同じように日常生活を送っています。しかし未信者はこの世における生活がすべてです。七〇年、八〇年のこの世の生活を楽しもうと、自分の思いのまま生きています。しかし主は「この地上の生活は仮住まいである」（一七節）と語ります。つまりキリスト者はこの世におけるわずか七〇年、八〇年の人生がすべてではありません。この世の人生に次ぐ神の国での永遠の生命があります。地上における最も高価と言われる金や銀であっても朽ち果てますが、キリストの贖いにより朽ちない者にされています。

しかしキリスト者が朽ちない者にされるためには、朽ち果てる者として生きてきた今までとは異なった道「新しく生まれた者」となる必要があります。キリスト者は、キリストと出会う前とは明らかに価値観が変わり、生活は一八〇度変わるのです。この様な変化（新生）はキリスト者自身が自発的に行えるものではありません。主の御霊の働きが必要

です。主が働かれる事により、私たちは理解しがたい真理を受け入れ、信じるものへと変えられ、神の国を求めた生活を求める者とされます（参照・ヨハネ三章一～二一節）。

主の御霊の働きにより私たちが人間として生まれ持った価値観が根本的に変化するからこそ、生活も変化します。死と地獄に向かう朽ちる種に育っていた者が、主の一方的な恵みにより、朽ちない種に植え替えられ、永遠の生命を持つ者へと接ぎ木されたからです。この朽ちる種から朽ちない種へ接ぎ木されることは、キリストと出会うことにより、初めて可能となります。その時、キリストの十字架により、罪の赦しが与えられます。そして、朽ちない種に接ぎ木されたキリスト者は、生きた言葉である神の御言葉を聞き続けることにより、主から永遠の生命にいたる栄養が与えられ、信仰が育まれていきます。

Ⅱ．捕囚の民の唯一の希望である神の御言葉

さてペトロは二四節でイザヤ四〇章六～七節を引用します。イザヤ書四〇章はイザヤ書において大きな分岐点を迎える章です。三九章までは南ユダ王国がバビロンに滅ぼされ、捕囚の民とされることが語られてきました。しかし四〇章からはバビロン捕囚の時代について預言します。しかし預言者は、国が滅ぼされ、捕囚の民とされたイスラエルに対してなおも、神の約束を待つべきであると励ましします。その理由の第一として捕囚からの救出が約束されています。この出来事は、キリストの十字架による真の救いを指し示しています。当時のバビロンは、文化、富、武力において強大な国でした。しかし預言者は、強大な国であっても草に等しいと語ります。栄枯盛衰があり、人間的に絶対的に見えても、主の御前には野の花の如く、滅び去ります。

一方、捕囚の民イスラエルは、人間的には非常にみじめであり、弱く見えます。希望はありません。しかしイスラエルの民は、神の変わることのない生ける御言葉によって生かされます。キリストの十字架による救いが示されている御言葉にのみ、真の救いがあります。事実、主は最後まで信仰を保ったイスラエルの民を、バビロンから解放してくださいます。私たちは、この朽ちることのない御言葉の希望が与えられています。

Ⅲ．救いに与る者の歩み

この救いの真理を私たちは聞き、受け入れ、信じています（二二節）。救いの真理を受け入れた者は、同時に魂が清められます。「魂」とは、「いのち、心」とも訳されます。主によって創造された人間は、肉体と共に魂を持つことにより、霊的に神との豊かな交わりが与えられます。しかし、人が罪を犯して以来、神との交わりは絶たれていました。罪の刑罰は死であり、魂もまた死んでいました。しかし主の御言葉による救いの真理を私たちが受け入れる時、永遠の生命が与えられ、さらに魂が清められ、聖霊をとおして主との豊かな交わりを回復します。

私たちと主なる神との関係は、一対一の垂直の関係です。しかし人間はこの神との関係だけで生きていくことはできません。兄弟姉妹との交わり、つまり水平の関係も必要です。神との縦の関係が回復し、命の水がそこに流れるようになることにより、隣人に対する愛が生じてきます。神を信じるキリスト者は、神からの豊かな祝福が与えられており、それは金や銀のような朽ち果てるものではありません。そうであれば、私たちは金や銀のような財宝、宝石、権力、権力を誇ったり、追い求めたりする必要が無くなり、永遠に変わることのない神の御言葉を追い求めていくことになります。朽ち果てぬ命をお与えくださる主は、地上における生活を送っている私たちに、必要なものはすべて備えてくださいます。だからこそ主による救いに導かれている私たちは、人のものを奪い取ったり、だまし取ったりすることは無くなり、互いに分かち合い、愛し合うことができるものとされています。

「乳飲み子のように」　ペトロの手紙一　二章一～三節　　二〇〇八年三月九日

Ⅰ．罪から離れろ！

一章の最後でペトロは、キリストの十字架の贖いにより朽ちない生命が与えられたキリスト者は、今までの生活とは異なる新しい生活が求められることを語ってきました。そして二章に入り、具体的にどの様な生活が求められているかを語り始めます。「だから、悪意、偽り、偽善、ねたみ、悪口をみな捨て去りなさい」（一節）。一つ、二つではなくすべての悪です。これ位のことならば許されるであろうと言うような安易な考えではダメです。

ここには似たような言葉が並べられています。私たちは、この様なリストが並べられていますと、一括りにして読み進んでしまいがちですが、しかしここにこうしたリストが並べられている事には、理由があります。

「悪意」これは、「罪」とも言い換える事ができます。主なる神に逆らうすべての行為、言葉、心の罪です。そして続く四つを「偽りと偽善」、「ねたみと悪口」の二つに分けることができます。前者は自分のことを相手に対して伝える時の偽りであり、誤った情報を流すのか、自らを高く見せかけようとするものです。特に「偽善」は人と同時に神を欺くことから背信、不敬神の意味もあります。他方「ねたみと悪口」は、相手との関係であり、ねたみは相手を自分よりも高く評価することにより、その高い評価が自分にないことから来る感情です。これは主がお与え下さった恵みの賜物・個性を否定する行為です。「悪口」は、相手を低く評価することから生じる言葉です。

つまり、自分に対しても相手に対しても、ありのままの評価をすべきであり、誤った評価をしてはなりません。言い換えますと、私たちの個性とは、主なる神がお与え下さった様々な恵み・賜物から成り立っているのであり、私たちはそれらの賜物を適切に用い、主の御業のために働くことが求められています。つまり等身大の自分を知る必要があり、私たちは主の御前に立ち、自分自身の姿を確認しなければなりません。このことは同時に、私たちは自分自身の弱さ、足りなさ、罪の姿が露わになります。それが主の御前に遜りとなり、人の前での謙虚さへとつながります。

Ⅱ．御言葉を素直に聞け！

次にペトロは次のように語ります。「生まれたばかりの乳飲み子のように、混じりけのない霊の乳を慕い求めなさい」（二節）。主イエスも、説教している最中、御自身に近づいてきた子どもたちを叱った弟子たちに対して「子供たちをわたしのところに来させなさい。妨げてはならない。神の国はこのような者たちのものである。はっきり言っておく。子供のように神の国を受け入れる人でなければ、決してそこに入ることはできない」（マルコ一〇章一四～一五節）と語られました。では、どの様な子どもとなるべきなのでしょうか。それは無心に主に仕えることであって、無知であってはなりません。無知は、サタンの誘惑に陥ることとなるからです。「兄弟たち、物の判断については子供となってはいけません。悪事については幼子となり、物の判断については大人になってください」（Ⅰコリント一四章二〇節）。「わたしはあなたがたを遣わす。それは、狼の群れに羊を送り込むようなものだ。だから、蛇のように賢く、鳩のように素直になりなさい。人々を警戒しなさい」（マタイ一〇章一六節）。「主により頼み、その偉大な力によって強くなりなさい。悪魔の策略に対抗して立つことができるように、神の武具を身につけなさい」（エフェソ六章一〇節）。

つまり、神の知恵を得ようとする上では、いつまでも初心者であってはなりません。「わたしはあなたがたに乳を飲ませて、固い食物は与えませんでした。まだ固い物を口にすることができなかったからです。いや、今でもできません」（Ⅰコリント三章二節、参照・ヘブライ五章一二節）。固い食物、つまり御言葉の深い理解ができるように、御言葉に聞き続けることが求められています。それが、主の日毎の礼拝に留まることなく、教会の諸集会における聖書や教理の学び、さらには家庭礼拝や個人デボーションが求められている理由です。

これは頭でっかちになれと語っているのではなく、聖書の知識を学ぶことにより、同時に身に付き、信仰生活と直結することが必要です。学びのための学びとなってはならず、そうした聖書知識が信仰生活に密着したものとならなければいけません。霊の乳である御言葉を蓄えることにより、主の真理を知り、この世にある罪や悪に対して戦うことができるような、神の武具を身につける必要があります（詩編一一九編一三〇節）。

つまり、乳飲み子のようになるとは、主が語られる御言葉を、霊的な食べ物として、無条件に受け入れ、御言葉の養いを受け続けなさいと言うことです（エレミヤ一五章六節）。

「神のもとに集う」　ペトロの手紙一　二章三～五節　　二〇〇八年三月一六日

Ⅰ．神のもとに集う者

ペトロは一章で、キリストを信じるあなた方はすでに朽ちない者とされているのであり、地上の生涯にあって朽ちる者のようにではなく、永遠の生命をお与え下さった主なる神を畏れて、生活することを求めていました。そのために朽ちない神の御言葉に聞き続け、新たに生まれなければなりません。具体的な生活として「悪意、偽り、偽善、ねたみ、悪口をみな捨て去って、生まれたばかりの乳飲み子のように、混じりけのない霊の乳を慕い求めなさい」と語られています（一～二節）。

そしてペトロは「あなたがたは、主が恵み深い方だということを味わいました」と語ります。「信じる」、「知る」ことは思想・知恵の概念ですが、「味わう」は味覚概念であり、私たちは体全体で神の恵みを体験することが求められています。「恵み深い味わい」つまり非常に美味しい料理を頂き、いつまでも余韻を楽しんでいるような快い味わいではないでしょうか。

そして「この主のもとに来なさい」とペトロは語ります（四節）。主なる神は私たちを美味しい料理を味わわせ、永遠に続く本当の喜びへと、無条件に招いてくださいます。

Ⅱ．礎のキリスト

旧約の時代、主はイスラエルの民を救うために彼らを召し出してくださいました。そし

て彼らは主を礼拝するための幕屋を建設することが求められました。幕屋の中には聖所と至聖所が設けられ、至聖所の中に、神と民との契約の箱が置かれ、神の臨在の場所とされました。しかし、主はイスラエルの民が主を礼拝するために、至聖所や聖所に立ち入ることは禁じられました。聖所には祭司が生け贄の度に入ることが許されましたが、至聖所には大祭司が一年に一度しか入ることが許されませんでした。それは、イスラエルの民が罪人であり、聖・義・真実であられる主は受け入れられないからです。

しかし、その主が「来なさい」とお語りくださいます。それは、私たちがイスラエルの民に比べて立派だからでもなければ、私たちの善き行いが受け入れられたからでもありません。主御自身が私たちの罪を赦してくださいました。キリストの十字架の故です。つまり、私たちの側が神に近づくことができるようになったのではなく、主なる神が御子をこの世にお遣わしくださることにより、私たちが主に近づくことが可能となりました。

キリストは、私たちを神と和解させ、救いに導いてくださいます。そのため人々から受け入れられ歓迎されるべきです。しかし神の民として選ばれていたはずのユダヤ人は、キリストを約束の救い主と認めず拒絶しました。それは、ユダヤ人が自分勝手なメシア像を作り上げ、そこから離れたことを行われた主イエスを受け入れることができなかったからです。そのため彼らは、主イエスを神を冒涜するものとして、十字架に架けたのです。

しかしキリストの十字架は、私たちの救いにとって必要でした。「神にとっては選ばれた、尊い、生きた石なのです」（四節）。ここでペトロは家を建てることに例えます。キリストは神の宮を形成するための「生きた石・礎」です（参照・イザヤ二八章一六節）。

いま隣家が建てられていますが、家を造るにあたり盛り土が行われます。しかしただ土を盛って固められているのではなく、コンクリートをしっかりと打ち付けます。こうして沼地であった柔らかな地盤であっても沈むことがなく家が建てられるのです。

キリストは、神の国におけるこの地盤です。石を組み合わされ土台を作り上げられる時の要石です。ユダヤ人はそれを「いらない」と排除したのですが、実はキリストを排除す

ることにより彼らの描いた神の国は崩壊したのです（マタイ二一章三三～四二節、詩編一一八編二二、二三節）。キリストという礎があるからこそ、神の国は生命を宿らせ、そこに集められた者たちが恵み深い味わいを得ることができるようになったのです。

Ⅲ．霊的な家を造り上げる

そしてペトロは「あなたがた自身も生きた石として用いられ、霊的な家に造り上げられるようにしなさい」（五節）と語ります。キリストが礎となった神の宮に入るからこそ、私たちキリスト者は、主の恵みに与ることができます。私たちも神の家の一部を形成します。それぞれがキリストにつながっています（参照・ヨハネ一五章四節）。キリストにつながり、それぞれが異なった賜物が与えられた一つの器官として、神の宮を形成します。必要のない者はいません。キリストの体として御言葉に聞き続けることにより、霊的な成長が与えられ、朽ちない者とされていきます。

「そして聖なる祭司となって神に喜ばれる霊的ないけにえを、イエス・キリストを通して献げなさい」。先程、旧約の時代、幕屋に入ることが許されているのは祭司だけであることを語りました。しかし、キリストが十字架にお架かりになられ、死を遂げられた瞬間、「そのとき、神殿の垂れ幕が上から下まで真っ二つに裂け」ました（マタイ二七章五一節）。神と民との間にあった罪という壁が、キリストの贖いにより取り去られたのです。だからこそ、キリスト者は罪が赦され、神の救いに入れられるものとなりました。そして、主は私たちが神のもとに行くことを妨げられることはなくなりました。そして私たち一人ひとりが祭司として主の御前に集うことができるようにしてくださいました（万人祭司）。だからこそ、私たちは主の御前に集められ、主に礼拝を献げることが許されています。

祭司としての勤め、それは主のもとに集い礼拝を献げるだけではありません。生け贄を献げることが求められます。しかし大祭司であるキリストが十字架の生け贄をお献げくださり、その生け贄によって私たちは朽ちない生命が与えられました。だからこそ、私たちは主がお与えくださる御言葉に聞き続けること、主の御業に倣い、朽ちない生命が与えら

れた神の民として相応しく生きることを行えばよいのです。

受難週のこの週、キリストの十字架を覚える一週間です。キリストの十字架により、私たちの礎が築かれました。だからこそ、私たちは主の御許に集うことが許され、永遠に続く神の国における生命の喜びに満たされ、主の恵み深さを味わいつつ、日々の生活を送ることが許されています。

「神は家のかなめ石」　ペトロの手紙一　二章六～八節　　二〇〇八年三月二三日

Ⅰ．キリストの十字架による贖い

イエス・キリストは、ユダヤ人たちにより捕らえられ、十字架の死を遂げられました。このキリストの十字架の死こそが私たちの罪の刑罰であり、キリストを信じる者はキリストの贖いにより罪が赦され、救いが与えられました。この事実をペトロは「あなたがたは、主が恵み深い方だということを味わいました」（三節）と語ります。信仰は、思弁に陥ってはならず、五感でその救いと恵みを感じ取るものです。神の恵み、救い、神が共にいてくださることを私たちは体全体で感じ取るのです。私たちは神の御前で行い・言葉・心により罪を行ったのですが、キリストが私たちの罪を背負うて十字架にお架かりくださいました。このキリストの十字架こそが、私たちが神の救いに入れられる時の神の家の要石です。キリストの十字架なしに、私たちの救いはあり得ません。

ペトロは、このことが旧約聖書の預言の成就であることを確認します（六節、参照・イザヤ二八章一六節）。シオンとは都エルサレムを指しており、キリストの十字架を指し示していると語って良いでしょう。しかし同時に、シオンという語を終末的な次元で捉えることも必要です。救いが完成する時、地上の都エルサレムは過ぎ去り、神の国としての霊的なエルサレムが到来します。それがシオンです。従って「選ばれた尊いかなめ石を、シ

オンに置く」と語る時、キリストの十字架の御業は、神の国の礎となり、神の民は神の国における平安、盤石な生活が与えられます。

だからこそ、キリスト者には失望がありません。すでに神の国に据えられたキリストの礎に、キリスト者すべてが誰一人漏れることなく招かれ、永遠の生命に与ることができるからです。ペトロは重ねて語ります（七節）。「掛けがいのないもの」とは「尊いもの」（口語）で、「誉れ」（一章七節）です。そしてこの言葉は、終末論的な意味合いがあります。つまり、私たちがキリストの十字架による救いを考える時、二〇〇〇年前のキリストの御業を顧みるのですが、それは同時に終末論的に考えなければなりません。二〇〇〇年前に固着していても、私たち自身の信仰、救いとは結びつきません。信じる者には、誉れ、栄誉が約束されています。ペトロは一章で、各地に散らばっているキリスト者が、信仰の故に苦しんでいる様子を語っていました。しかし地上における朽ちる体に固着することなく、朽ちない体としての神の国を見据えなさいと、ペトロは彼らを励ましていました。そうすることにより、キリストによって与えられる神の国の永遠の生命が、私たちの生活を平安へと導きます。

Ⅱ．キリストを拒絶する者

ペトロはさらに二つの旧約の預言を語ります（七、八節・詩編一一八編二二節、イザヤ八章一四節）。キリストを拒絶する者、それは最初ユダヤ人たちに起こります。キリストを逮捕し、十字架に架けた人たちです。本来、神の国の要石とされるべきキリストを彼らは受け入れませんでした。要石となる石が外されるとどうなるのか？家は傾き、崩壊へと向かいます。ユダヤ人はメシアを求めていました。しかし、彼らは要石であるキリストをいらない石として捨てたのです。そのため、彼らは崩壊していきました。

Ⅲ．消極的な二重予定

八節では、ユダヤ人のことを「つまずきの石、妨げの岩」と語ります。彼らは要石を捨てただけではなく、その捨てた石に躓くきます。しかしそのことは、そうなるように以前

から定められていたことです。予定と遺棄の問題です。キリストを否定する者は、神によって遺棄に定められているから、キリストを否定するのではありません。キリストの神性を否定し、復活の奇跡を否定し、救いを求めないため、救いから漏れるのです。そのことを、主は永遠の予定の内に入れておられます。つまり、彼らは主の予定を知って自ら捨てられるべき行いをするのではなく、主のご計画は隠されており、彼らにも自由意志が与えられていました。そして彼らは自らの意志において、キリストを拒絶します。そのためキリストに躓く者たちは、罪の裁きを神の責任にすることは許されていません。

一方、キリストの十字架の御業の故に、キリストを信じる者には、救いが与えられ、神の国シオンにおける永遠の生命が与えられています。地上における生活において、なおも様々な格闘があるかと思いますが、主がお与えくださる救いと神の国の永遠の生命を確信する時、感謝と喜びに満ちつつ、日々歩み続けていくことができるのではないでしょうか。

「暗闇から光の中へ」　ペトロの手紙一　二章九～一〇節　　二〇〇八年三月三〇日

Ⅰ．主なる神の一方的な恵み

現代に生きる者にとって、生きることにおいて暗闇はなくなったかの如くです。快適な生活は、聖書の時代とは比べものにはなりません。しかし、本当に現在の生活から暗闇は無くなったのでしょうか？　決してそんなことはありません。社会の歪みから来る様々な苦しみ、労苦、病気、そして誰一人として死を避けて通ることはできません。しかし、今日、他人が死んでいく姿を目にすることが非常に減っています。そのため、人は自らの死と真に相対することなく、日々の生活を送っています。他人を傷付け、他人を陥れるような事件が増えているのは、他人の痛みを実感することができなくなっている人々がいるからであり、まさしく自らの死の恐怖がないことの裏付けではないでしょうか。

しかしこれは一時的な誤魔化しに過ぎません。人は誰しも、死を避けることはできません。罪の故の肉体の死と永遠の死がある以上、人は、今なお暗闇の中を歩んでいます。

しかし聖書は、神から捨てられ永遠の死に向かって歩んでいた者が、罪が赦され神の子として永遠の生命を持つ者とされたことを語ります（九～一〇節、ホセア二章一～三節）。ここで引用されているホセア書において、ホセアは主によって召され預言者とされますが、主は彼に淫行の女をめとるように命じます。そして生まれ来る子どもたちの名を「イズレエル（神の裁きを象徴する名・列上二一章、列下九章）」、「ロ・ルハマ（憐れまれぬ者）」、「ロ・アンミ（わが民でない者）」と名付けるように命じます。これは、主が神の民イスラエルに対して、自らの現実の姿を直視するように命じられています。人の罪の姿です。

こうした罪深い人間に対して、主は、「ロ・アンミ」ではなく「生ける神の子ら」であり「アンミ（わが民）」である、「ロ・ルハマ」ではなく「ルハマ（憐れまれる者）」であると宣言してくださいます。ここに、主なる神の一方的な恵みが示されています。

Ⅱ．光の中に生きる者

ペトロは、光の中に招き入れられたキリスト者がどの様な存在であるのかを、四つの言葉を用いて語ります（九節）。①「選ばれた民」（参照・イザヤ四三章二〇節）。ホセア書で理解できるように、神の御前に絶縁状態に置かれていたイスラエルが、主の一方的な恵みにより、憐れまれ、神の民とされました。この神の一方的な選びが、キリストの十字架により、イスラエル・異邦人の区別なく、すべてのキリスト者の上に与えられています。この救いの根拠は、神の一方的な選び以外、なにものでもありません。またここで「民」と訳されている言葉は「種類」であり「種族」（口語訳・新改訳）です。つまり「選ばれた種族」であり、神との一対一の関係ではなく、クリスチャンは一つの種族です。教会論的に捉える必要があります。そうすれば、「私は神を信じている」だけでは済まされず、神のお招きになる礼拝に集い、兄弟姉妹との交わりが求められます。

②「王の系統を引く祭司」（参照・二章五節、出エジプト一九章六節）。キリスト者は皆、神を礼拝し、神に仕える祭司とされています。万人祭司です。祭司は、神に仕え、神に犠牲を献げ、神を礼拝し、また民のために執り成しの祈りを行います。そのため、キリスト者は、神からの祭司とさせられたものとして、自分自身の全生活を供え物として神を礼拝し、神に仕えます。教会に集うキリスト者が、祭司として神に仕えることにより、神の栄光が誉め称えられるのであり、このことこそ主の創造の目的です（黙示録五章九～一〇節）。

③「聖なる国民」（参照・出エジプト一九章六節）。罪深い私たちを、主はわが民として下さったばかりか、キリストによって私たちの罪を憐れみ、罪を償ってくださいました。こうして私たちは、私たち自身の善き行いではなく、主なる神からの一方的な恵みと贖いにより、義と認められ、聖なる者とされました。今なお罪人である私たちは、キリストの十字架により、義と認められ、聖なる国民とされ、永遠の生命に与るものとされています。

④「神のものとなった民」。こうして主なる神によって召され、キリスト者とされた私たちは、神の民、神の子とされています。神の子としての特権として、永遠の生命と祝福が与えられ、神の御許にいつもあることにより、主からの加護と祝福が与えられています（参照・ウェストミンスター大教理問七四）。キリスト者は、この様な大きな特権が主から与えられ、恵みに満たされています。

Ⅲ．主を証しする者へ

では、これ程の恵みと特権が与えられた私たちは、何もしないでよいのでしょうか？決してそうではありません。「あなたがたを暗闇の中から驚くべき光の中へと招き入れてくださった方の力ある業を、あなたがたが広く伝えるためなのです」（九節）。主を証しする者とされています。光は闇を照らします（マタイ五章一五～一六節）。キリスト者は、地の塩、世の光であるべきであり、光は人々を照らすために用いる必要があります。

私たち自身が、キリストの十字架による救いにある光の中を歩んでおれば、朧気の中を

歩んでおり世を謳歌している人々に対しても、まぶしく、真の光へと招く力があります。そのために、私たちは、まず私たち自身が救われ、主からの特権に入れられている信仰を確かにし、揺らぐことなく主に仕え、主を礼拝し続けることが求められています。

「立派な生活」　ペトロの手紙一　二章一一～一二節　　二〇〇八年四月六日

Ⅰ．神の愛と我々の安住の地である神の国

ペトロはこれまで、キリスト者とはどのようなものであるか、一般的な教えを語ってきました。そして、二章一一節以降において、キリスト者の生活を具体的に解き明かしていきます。一一～一二節はその序にあたり、全体的なことが語られています。ペトロは「愛する人たち」と語ります。この手紙の受取人は、ポントス、ガラテヤ、カパドキア、アジア、ビティニアの各地に離散しているキリスト者です（一章一節）。共に迫害を忍び、苦難を共にしています。彼らはいわば旅人であり、仮住まいの身です（二一節）。周囲に理解者のいない孤児のようです。迫害され、生きる希望すら失せ、背教の道を選ぼうかと思う者に対して、「あなた方は一人ではない。主によって愛されている」とペトロは暖かい言葉をもって励まします。この主の愛は、今、私たちにも向けられています。無神論、偶像崇拝者に囲まれ、信仰を見失い、教会から離れていく者もあります。しかし、主の私たちに対する愛は変わりません。

ペトロが「あなたがたはいわば旅人であり、仮住まいの身である」と語ることは、私たちの今の苦難は一時的なことであり、安住の地は別の所、つまり天、神の国にあることを語っています。パウロの言葉を借りれば、「我らの国籍は天に在り」（ピリピ三章二一節（文語訳））です。言い換えれば、天国という安住の地があるからこそ、私たちはこの世と妥協する必要はなく、背教する必要もないのです。

アブラハムは、主の御声を聞き、主の言葉を信じて旅立ちます（創世記一二章）。私たちもアブラハムと同じです。主は私たちを救い、天国に導いてくださいます。この世にある様々な誘惑に、心を奪われてはなりません。

「肉の欲」（一一節）とは、動物的な本能的な欲望ではありません。私たちに迫ってくるすべての罪、欲望、自己中心的な願望のすべてです。私たちは、主の語られる御言葉を聞くことから離れ、主による救いを忘れた時、日々私たちに働きかけてくる様々な誘惑に惑わされていきます。それが、ギャンブル、酒等自らの身を滅びともたらします。また、神による救いを忘れさせ、背教を迫ります。だからこそ、神の愛を知り、キリストの十字架による救いを真に受け入れ信じることが求められています。そうすることにより、そうした誘惑に対して、心引かれ、罪を犯すことから守られます。

Ⅱ．信仰を貫き、主の御言葉に仕える

続けてペトロは、「異教徒の間で立派に生活しなさい」（一二節）と語ります。キリスト者はこの世では旅人ですが、旅の恥は掻き捨てであってはなりません。「神を信じていれば救われる。だから今は自分の思うがまま生活する」では済まされません。一期一会という言葉がありますが、一生に一度の出会いであっても、その出会いにより私たち自身のキリスト者としての生き方、信仰が、その人に伝わることが求められています。それは神により救われ、神の国に入る者としての喜びの生活です。

主は、私たちが神の子に相応しい者となるために、私たちに律法をお与えくださいました。律法に従うことは、罪から離れるだけではなく、同時に私たちの生活が神の御心に適うものへと導かれることです。天に国籍がある者としての相応しい生活が、律法に倣う生活です。具体的な生活については一三節以降で語られていきますが、立派な行いとは、決して人から誉められる事だけではありません。十戒の第二の板（第五戒～第十戒）の隣人への愛の業を行うことは人に誉められる事でもあります。しかし第一の板（第一戒～第四戒）に属する信仰の事柄に関しては、主なる神を礼拝することにより、時として人々の躓

きとなることもあります。私たちはこうした時にも、主の御声に聞き従うことが第一に求められています。人の目に気に入られる事を行うことなく、非難を浴びようとも主の真理を貫こうとすれば、時として、悪人呼ばわりされ、嫌われることもあります。しかし、信仰・真理を貫くことにより、一目おかれる存在となり、やがて、今までキリスト者の行動を非難していた者が、救い主を信じ、喜んで神を崇める者へと変えられる時が与えられます。これこそが真の伝道です。真理を貫く姿を人々は遠目に見ており、真のキリスト者を主の御前に呼び集めます。主は私たちを愛し、救いに導いてくださいました。だからこそ、私たちは救いの喜びをもって主の御声に聞き従い、真理の道を歩み続けていくことが求められています。

「為政者に倣う」　ペトロの手紙一　二章一三～一五節　　二〇〇八年四月一三日

Ⅰ．為政者

ペトロは、主による救いに入れられ神の国に招かれている者として、この世にあっても救いの感謝と喜びをもって、主を証しする立派な生活を送るように語ってきました。そして一三節以降で具体的なことが語られます。その例として、皇帝、総督というローマ帝国における当時の統治者が記されており、為政者に従うことが全面に出てきます。しかしここで語られている制度とは、為政者のみならず、この世に立てられているすべての制度に従うことが求められています。

主なる神は、天地万物を創造され、今なおそのすべてを統治されています。ヨブ記（一章・二章）で理解できるように、サタンも主の許しなしには私たちに働きかけることはできません。為政者も、悪を行う者を神に代わって処罰し、善を行う者をほめるために主によって立てられており、主の栄光のために働くことが求められています（参照・ウェスト

ミンスター信仰告白二三章一節、ローマ一三章一節）。つまり主は、霊的に統治し人々の信仰を保つものとして教会を立てられ、同時に社会の秩序を保ち人々の生活を守るために為政者を立てておられます。古くから為政者と教会との間に権力争いがありました。宗教改革の時代にも激しな議論がありました。国家による教会（宗教）の支配は現在的な問題でもあります。しかし主なる神は、一般の世的な統治を国家に託し、霊的統治を教会に託します。その両者は上下関係はなく、統治分野が異なります。政教分離という言葉がありますが、国家が教会や宗教を支配してはならず、逆も然りです。

Ⅱ．制度に従うこと、罪との問題

当時のローマ皇帝は、キリスト者を迫害していた当事者です。キリスト者は迫害に耐えつつ信仰生活を続けていました。それでもなお主は、上に立てられた権威者に従うべきだと語られます。なぜなのか？　キリスト者は、主を証しするため、為政者に対して無条件に従うことが求められているのでしょうか？　決してそうではありません。為政者に従うことは、主のしもべとして、主の御言葉に聞き従うことが前提です。つまり、主の御言葉（律法）に逆らった命令を、為政者が命令する時、キリスト者は、為政者に従うことなく、主の御言葉に聞き従うことが求められています（参照・ダニエル三章、出エジプト一章一七節）。

こうしたことから、キリスト者（教会）が、為政者（国家）との関係はどうあるべきかが明らかになります。現在、様々な事柄が政治的に問題とされています。しかし私たちは個人的に気に入らないことであっても、キリスト者は為政者の決定に従うことが求められています。一方、為政者の決定により、主の御言葉に反することが求められる時、キリスト者は、その決定に対して「否」を語ることが求められています。その第一が、偶像崇拝に関わることです（十戒第一の板）。また、戦争反対、平和について教会が訴えていくことも、これにあたります（十戒第二の板）。主が求めておられることは、弱い者に対する愛であり、和解することです。相手が誤りを犯しているのであれば、忠告し、戒め、悔い改

めを待たなければなりません。それでも相手が聞き従わない時、最終的に罪の裁きは、主に委ねるべきです。戦争行為は、第二の板のどの戒めにも反する行為です。

Ⅲ．救いにあるキリスト者の態度

ペトロは「善を行って、愚かな者たちの無知な発言を封じることが、神の御心だからです」と語ります（一五節）。私たちキリスト者が、主の御言葉によって示された正義を貫き、真理を貫くことにより、時として主を受け入れ、罪を悔い改め、信仰に入る者も与えられます（一二節）。しかし決して信仰に導かれない者であっても、キリスト者によって主が証しされることにより、自らの無知、罪が示され、主による裁きが示される必要があります。最終的な罪の裁きは、私たち自身の手で行う必要はなく、主が成し遂げてくださいます。その時まで、キリスト者として忍耐が求められます。しかしそうしたキリスト者の信仰を、主は良しとしてくださり、神の民に相応しい者としてくださいます。

私たちはこの後、主の晩餐に与ります。私たちはキリストの十字架による罪の赦しと救いに与っています。神の国の永遠の主の祝福に満ちた生活が約束されています。だからこそ、どの様な時にあっても、主の御言葉に聞き従い、主を証しする者として世に立てられた為政者やすべての制度に従う者であることが求められています。

「神のしもべ」　ペトロの手紙一　二章一六～一七節　　二〇〇八年四月二〇日

序．

ペトロはキリスト者が「神のしもべ」であると語りつつ、一方で「自由」であると語ります。「僕＝奴隷」と「自由」は、相反する言葉であるように思います。また、クリスチャン＝神の僕であると、「その様な束縛されることは嫌だ」と言われる方もいるでしょう。しかしこうした意見は、私たち人間が生まれながらにしてどの様な存在であるか、またク

リスチャンになって何が与えられたのかを忘れていることから出てくる言葉です。私たちは、神の子とされ、神の僕とされたからこそ真の自由が与えられています。

Ⅰ．「罪の僕」から「神のしもべ」へ

クリスチャンになるとは、何からの自由なのか？　それは死からの解放・自由です。人間は、生まれてきた時に、すでに死に定められています。罪の奴隷状態に置かれているからです。だからこそ、イエス・キリストに背く者は例外なく、死ぬことを免れることができません（参照・ウェストミンスター信仰告白九章三節）。

しかし、キリストと出会いクリスチャンとなることは、罪の支配から自由にされ（ローマ六章、ヨハネ八章三一～三六節）、キリストの十字架により罪が償われた者として罪責から自由にされ（ガラテヤ三章一三節、黙示録一章五節）、さらに自分の力で完全な義を功績を積み上げる不可能な義務からも自由にされました（ガラテヤ五章一～一四節、使徒一三章三九節、ローマ六章二三節）。

「自由」（解放）の本質的な意味についてはイザヤ書六一章で預言されていますが、主イエスが解き明かしておられます（ルカ四章一八～一九節）。イエスは「この聖書の言葉は、今日、あなたがたが耳にしたとき、実現した」と語られました。これは、旧約において語られた「自由」や「解放」が、主イエス御自身、つまりキリストの十字架によって与えられることを語っています（参照・ウェストミンスター信仰告白九章四節、二〇章一節）。

ペトロが、自由な人として生活しなさいと語るのは、まさしく罪に定められていた者が、罪から解放されている者として自由な生活をせよということです。つまり、キリストの十字架が自らの罪の赦しであることを信じる時、罪の死から完全に解放されています。

しかし「クリスチャンになることは、聖書に従って生活することであり、自由がなく窮屈である」と考える人が少なからずおられるのも事実です。しかし、クリスチャンとしての生活において自由が奪われると考えることは、キリストの十字架によって与えられる死

からの解放、罪からの解放を理解していないからです（ウェストミンスター信仰告白二〇章三節）。つまり、自由とは何を行っても良いことではありません。罪を犯さない上での自由です。罪から離れ、罪赦された者、神の子としての自由です。「死」から目を逸らせ、死の恐怖を忘れてはなりません。

Ⅱ．自由な者の生き方

さてペトロは、キリスト者として隣人への接し方に関して語ります（一七節）。ここには四つのことが語られていますが、順番、それぞれの違いを確認する必要があります。まず順番ですが、すべての人、兄弟姉妹（クリスチャン同士）、神、そして皇帝です。前三つと後者です。

まずすべての人に対して敬うことが求められます。第五戒にあります「父母を敬え」と同じ言葉です。サマリア人の譬えにおいて、主イエスは、異邦人であろうと、苦しみ助けを求めている人に対しては、助けることを求めておられます（ルカ一〇章二五節以下）。私たちは、異邦人・知らない人・嫌いな人であるからと言って、苦しんでいる人を見殺しにしてはなりません。これがすべての人に対するキリスト者の姿です（参照・ウェストミンスター小教理問六四）。

次に、キリストの枝としてのクリスチャン同士、愛するように命じています。聖徒の交わりです（参照・ウェストミンスター信仰告白第二六章）。

次に神に対しては「畏れよ」と語ります。すべての人を敬い、兄弟を愛することは、水平な関係ですが、主なる神に対しては、上下関係です（一六節）。

最後に皇帝についてです。世に立てられている為政者は、たとえクリスチャンたちを迫害しようとも、主が立てた権威者として、主の御言葉に反しない限り、従うべきであることを確認してきました（参照・一三～一五節）。しかし為政者は、自らを神の位においてはなりません。あくまでも人間の一人です。

つまり、キリスト者となることは、キリストの十字架により死と罪から解放させられ自

由にされた者として、徹底的に神の僕として生きることです。ここに神の子、人間としての真の喜びがあります。一方、為政者は無視してはならず敬わなければなりませんが、主に仕えるように無条件に隷属する相手でもありません。

「主人への敬い」　ペトロの手紙一　二章一八～二一節　二〇〇八年四月二七日

序．

ペトロは、主によって救われ、神の国に国籍を持つ者として、この世においては、立派に生活するように語ってきました。そして一三節では「すべての人間の立てた制度に従いなさい」と語ります。第一に為政者に、そして今日の所では主人に従うように語ります。

Ⅰ．召し使い

「召し使いたち」（一八節）とは、奴隷ほどの身分ではないものの、当時、家庭に仕えていた雇い人のような人たちのことを指しています。当時、こうした多くの奴隷や召使いがいましたが、その中からキリスト者へと回心していた人たちも多くいました。そして彼らは、自らの立場を踏まえつつ、今日与えられたペトロの言葉を受け取ったのです。

ここで確認しなければならないことは、ペトロは直接奴隷制度に関して否定してはいません。主イエスも同様です。そのため、長い間、教会においても、奴隷制度が否定されることなく、受け入れられてきました。アメリカにおいて奴隷制度や人種差別が肯定されてきた歴史があります。南アフリカのアパルトヘイトはつい一〇年位前まで残されてきていました（一九九一年廃止）。これらの差別に教会の果たした罪は大きいです。しかし主イエスの言葉と聖書全体は、隣人への愛を語り、社会的弱者、身分の低い者も同じように愛することを語り、究極的に奴隷制度や身分も越えた、人々への愛が語られています。従って、現在では、聖書が奴隷制度を支持していると解釈することは、決して受け入れられま

せん。

Ⅱ．無慈悲な主人に従え？

さて話しが大きく逸れました。ペトロは、現在における使用人・労働者もまた、雇用主・上司に従うように求めています。特に注目すべき事は、「寛大な主人にだけでなく、無慈悲な主人にもそうしなさい」です。「無慈悲な」は、直訳すれば「曲がっている」で、「気むずかしい・横暴な・情けなき者・情け知らずの・意地の悪い」と訳されています。人は主の御前に罪人であり、誰しも罪があります。それが自我であり、欲望、権力欲、支配欲です。キリスト者も罪赦された罪人です。つまり、私たちも「意地悪い」上司になり得るのであり、またこうした上司がいることも多々あります。当時も現在と同じように、そうした上司がいました（テトス二章九～一〇節）。ですから、そうした上司に仕える者にとっては、非常に労働条件の悪い職場と言えるでしょう。職業の自由があり、転職が簡単な現在では、こうした上司がいれば、会社をすぐに辞め転職するか、あるいは別の部門に移ることができるように行動する人もいるでしょう。

Ⅲ．横暴な主人であっても、仕えなさい！

ではなぜ、ペトロはそのような横暴な主人であっても、心からおそれ敬うように語るのでしょうか？　主なる神が天地万物を創造し、すべてを統治しておられるからです。主は、御子イエス・キリストをこの世にお送りくださり、キリストの十字架の御業により、私たちを罪の赦しと永遠の生命の祝福に満たしてくださいました。それと同時に、すべてを統治しておられる主は、ここで語られているような主人をも立てておられます。つまり、主の統治と予定です。そしてこうした苦痛をも、主が私たちにお与えになられています（一九節）。私たちはどうしても自分を中心に考えてしまいます。しかし主のご計画は、神の国の完成であり、完成された神の国に神の民であるキリスト者を導くことです。罪深い、どうしようもない者を、キリストの十字架により罪を赦し、永遠の生命をお与えください。そのため私たちは神の子に相応しい者となるために、聖化することが求められます。

私たちは自分の力でこうしたものを手に入れることはできません。主がお与えになられた試練を耐え忍ぶことにより、主によって聖化されていきます（参照・一章六～七節）。また、主は御自身が与えられた試練に耐えられ、逃れる道をも備えてくださいます（Ⅰコリント一〇章一三節）。

またキリストの十字架の苦しみは、私たちの模範として示されています（二一節）。キリスト者はキリストに倣うことが求められます。それは律法に従って罪から離れ、主の真理に従って正しく生きること、主を愛するように人々を愛する生活です。それは同時に、キリストが十字架を担われたように、私たちに与えられた十字架を担うことが求められています。私たちの罪はキリストがすべてを担ってくださいました。しかし私たちは自らの罪を覚え・顧み、悔い改めつつ、十字架を背負って生きることが求められています。そうすることにより、謙虚・謙遜が与えられ、真の救いが与えられた喜びに生きものとされます。

「キリストによる義」　ペトロの手紙一　二章二一～二五節　　二〇〇八年五月四日

Ⅰ．御子イエス・キリストを顧みよ

無慈悲な主人に対しても従うことがキリスト者に求められています（一八～二一節）。その理由の一つに挙げたことが、主なる神の天地万物の統治とご計画です。主のご計画は、義しく、主なる神によって召され救いに導かれている私たちの救い・祝福に向けられています。その中、主が私たちの信仰を養う時、この様な試練をも与えられるのであり、神の子とされている私たちは、その試練を乗り越えることもできるものとされています。

この時、私たちはイエス・キリストをも顧みる必要があります。主イエスは、神の御子であり、真の神そのものです（神性）。そのためキリストは、病人を癒されたり、死人を

甦らせたりもなさる力を有しておられます。湖の上を歩くことすらも可能なお方です。この真の神であられるキリストが人として遜られました（フィリピ二章六～七節）。そうした中、生涯にわたり、特に十字架の苦難において、苦しみに耐えられました。人間の姿で現れ、遜り、死に至るまで、それも十字架の死に至るまで従順でした（フィリピ二章七～八節）。

愛弟子であるイスカリオテのユダに裏切られて逮捕され、朝に至る続けざまの裁判においてサンヘドリンの議員たち、ヘロデ王、ポンティオ・ピラトから尋問を受け、侮辱され、あざけられ、鞭を打たれます（マタイ二七章二七～三一節）。このように、罪のないお方が罪に定められました。鞭で体を叩かれ、瀕死の状態で、キリストは十字架を担いでゴルゴタの山に登って行かれます。これは、キリストが父なる神のご計画に従われたからです。それは主イエスの祈りに表れています。「父よ、できることなら、この杯をわたしから過ぎ去らせてください。しかし、わたしの願いどおりではなく、御心のままに」（マタイ二六章三九節）。キリストは、すべてを正しくお裁きになる方、つまり父なる神にすべての裁きを委ねられ、御自身に果たされた働きをまっとうされました。

私たちの隠されている罪が露わにならないことはありません。たとえ一時、罪が隠されていたとしても、主はすべてをご存じであられ、最後の審判において、すべてを裁いてくださいます。キリストが、どのような苦しみにあってもそれに耐え忍ばれたのは、父なる神の正義と審判に委ねることができたからです。

Ⅱ．キリストの十字架

しかし、主は私たちに苦しみに耐える事ばかりを求めておられるお方ではありません。キリストは、十字架に架かり、自らその身にわたしたちの罪を担ってくださいました。キリストは祭司として御自身の体を祭壇に献げられることにより、私たちの罪の刑罰としての呪いを引き受けてくださいました。キリストは私たちの罪を贖い、私たちの罪の償ってくださいました。だからこそ私たちは、神の裁きにおびえる必要は無くなりました。

第二にキリストの十字架により、わたしたちが義によって生きるようになるためです。つまりキリストは、私たちの負債である罪を取り除いてくださるばかりか、神の子に相応しいものとして、「義」を獲得してくださいました。キリストの十字架を信じる者は、皆がキリストにより義とされ、神の国に入ることが許されています。「信じなければならない」ではなく、主が私たちの罪を取り除き、永遠の生命の宿る神の国に導いて下さっているからこそ、私たちは安心することができ、感謝と喜びが信仰に表れてきます。

さらにキリストが十字架にお架かられたことにより私たちは監督者である主の所に戻ってくることができます。私たちは独りではありません。主が一緒にいてくださいます。

最近、生きる希望を失った人たちの自殺者が増えています。未来に希望がもてず、一人ぼっちで、どこに向かっているのか分からないからです。しかしキリストは、さまよっていた私たちをお集めくださり、御言葉を通して魂の養い、苦難の中にあっても生きる希望をお与えくださいます。祈りを聞き届けてくださいます（参照・詩編二三編）。

Ⅲ．真の喜びに包まれる信仰生活

私たちは、この様に私たちを救いに導いて下さったキリストの僕・弟子とされています。主なる神との霊の交わり、加護、永遠の生命の約束に与っているからこそ、無慈悲な主人であって、主がお立て下さった主人に従うことができます。この様なキリスト者の信仰が、どの様な状況の中にあっても、迫害に耐え、殉教の道すらも受け入れることができます。

キリスト教の二〇〇〇年の歴史は、同時に迫害と殉教の歴史です。ペトロを初めとするすべての使徒たちが信仰を貫き、殉教の道を歩みました。ローマ帝国においてキリスト教が国教化されるまで、多くの信徒たちが信仰の故に殉教を遂げていきました。日本でも、キリシタンがいました。第二次大戦中には、朱基徹牧師が死に至るまで信仰を貫かれました。

彼らが、迫害・虐げを受け、死に至るまで従順であったのは、キリストの御業により、罪が赦され、神の国の永遠の生命が与えられ、神の子として神の守りがあるからです。

「信仰と家庭」　ペトロの手紙一　三章一～七節　　二〇〇八年五月一一日

Ⅰ．異教徒の間に生きるキリスト者

今日からペトロの手紙三章に入りますが、話しのつながりから考えれば、二章一一節から続いている話しです。ペトロは、「異教徒の間で立派に生活しなさい」（二章一二節）と語り、その具体的な問題として、①すべて人間の立てた制度に従うこと、②召し使いたちが心からおそれ敬って主人に従うことを語り、③「妻たちよ、自分の夫に従いなさい」と語ります（三章一節）。

今日の箇所では、主は妻に対して語られることから、「聖書は古い・男尊女卑である」と言われることもあります。しかしそうではありません。聖書の立場を確認する必要があります。①創造者・贖罪者である主なる神の御前に立つ私たちの視点です。つまり、すべての人間は、主の被造物であり、どの様な立場の人間であっても、主が遣わされた者です。②主はすべての人間を等しく愛しておられ、救われること、命の恵みに共に受け継ぐことを求めておられます。当時は家庭にあって妻は夫に隷属するものでした。その中、聖書は妻も命の恵みを共に受け継ぐ者として夫と等しい者であることを語ります（三章七節）。

しかし人間には罪・欲望があり、それ故に支配する側と支配される側が生じます。主が天地創造された時、人の間に支配と従属はありませんでした。また、神の国が完成した時には、こうした支配者・被支配者の関係も無くなります。そうした中、今生きる私たちは、差別・格差の社会に生きており、主は私たちがこの社会でどのようにキリスト者として生きていくべきかを、御言葉を通してお語りくださいます。

Ⅱ．夫に従う妻

ペトロは社会的弱者である妻に対して詳細に語り始めます。当時、妻だけが信仰を持っ

ている家庭がかなりあったようです。主は、妻たちにキリスト者として夫に従うことを求めます。これは現状追認ではありません。聖書が奴隷制度を肯定せず、むしろ神の求めではないことと同様、聖書は男性が女性を支配することを認めているわけではありません。創世記二章で最初に人が作られ、続けて女が与えられます。妻は夫の助け手であり、主から本来与えられた働きに違いがあり、ここに上下関係は存在しません（参照・創世記二章二〇～二二節）。

その上でペトロは「自分の夫に従いなさい」と語ります。キリスト者は、主の御言葉に聞き従う者として、主が立てられた制度に従うのです。これは盲目的服従ではなく、互いにそれぞれの働きの違いを理解し尊重しつつ、妻は夫の助け手として夫に従うのです。

Ⅲ．妻から夫への伝道

続けてペトロは、未信者の夫に対しても、妻の信仰から来る純真な生活により信仰に導かれるようになることを語ります。キリスト者である妻は、第一に主の御言葉に聞き従うのであり、そのことが地の塩・世の光としてキリストを証しします。この行いは、たとえ言葉がなくともキリストを証し、御言葉が伴うことにより力あるものとなります。

しかしここには忍耐が必要です。一〇年、二〇年、あるいは一生かかることもありますが、主は信仰者の祈りを受け入れてくださいます。ですから私たちは、熱心さよりも、主に委ね祈り続ける事が求められます。主の御業を、私たちは自分の手柄にしてはなりません。このことは、私たちの伝道のすべてにおいて、言えることです。

Ⅳ．キリスト者としての生き方

続けてペトロは、外面的に着飾ることに言及します（三～四節）。このことも今や女性に限らず、男性も耳を傾けるべきことです。主が私たちに求めておられることは、「今どの様に生きるか」ではなく、キリスト者としてどこにむかって生きているのか、異教徒の間にあってどの様にキリスト者として生きていくべきかが、問われています。ファッションは流行廃れが激しく、ブランド・貴金属も最終的には廃れます。しかし主はキリスト者

に、神の御国における永遠の生命をお与えくださいます（一章四節）。ここで主は内面的な人柄を求められます。土の器である私たちが内面をそのまま出すと、人に対する誹謗・中傷が出てきます。従って私たちは、土の器である内面に、朽ちず、汚れず、しぼまない財産としての御言葉を蓄えることが必要です。私たちの救い主イエス・キリストは、十字架の御業を成し遂げ、すでに私たちに罪の赦しと永遠の生命を獲得してくださいました。しかし、日々の生活に追われる中、私たちはこの真実の喜びを忘れてしまいます。そうすると外面的なことを求め、自我が出てきます。だからこそ私たちは一日一回、主の御前に静まり、主の御言葉に聞き、御言葉を蓄えることが求められています。そうすることにより、土の器に、主の御言葉が蓄えられ、それが日々の内面的な人柄に表れてきます。そのことが強いては家庭において、社会において、キリストを証しすることとなります。

「言葉と謙虚さ」　ペトロの手紙一　三章八～一二節　二〇〇八年五月一八日

Ⅰ．聖徒の交わり

「終わりに」とは（八節）、二章一一～三章七節において語ってきたこと、つまり①すべての制度に従い、②主人に従い、③妻は夫に従い、夫は妻を尊敬する者として、非キリスト者に対してキリストを証しすることを受けています。そしてここではキリスト者相互の交わりと非キリスト者の中での生活について語られています。

最初は聖徒の交わりについてです。当時、ペトロが手紙を書き送っていた各地の教会も小さな群れであり、肩を寄せ合うように生きていました。ノン・クリスチャンに対する証しの生活が求められていた中、クリスチャン相互の聖徒の交わりがどのようにして形成することができるかをここで確認します。

八節には五つのことが語られています。①キリスト者も互いに個性があり、異なった賜

物を持ち合わせていますが、キリストにあって一致し、神の国の完成に向けて一つになることができます。②キリスト者は、多くのノン・クリスチャンの中に生活し、信仰的に様々な苦しみ・忍耐が強いられます。だからこそ互いに同情し合います（ローマ一二章一五節）。③兄弟を愛するは、キリストにある愛情であり、キリスト者相互の愛です。④憐れみは、行いに留まることなく感情などにも配慮・同情的な優しい心を持つことです。互いに弱く、特に迫害の中にあれば挫けそうになります。そうした中、互いに憐れみ深く、祈り合うことが求められています。⑤謙虚になることは、新改訳聖書では「謙遜」と訳します。

つまり、これらの五つは、①心を一つにすること、⑤謙虚になることが底辺にあり、②同情し合う、④憐れみ深くあることが重なり合い、③兄弟愛が頂点となる山が形成されています。つまり、この聖徒の交わりは、互いに同じ方向（神の国）を向き、互いに配慮し合うことが求められています（参照・ウェストミンスター信仰告白二六章二節）。しかし人は、他者の状況を確認することなく、人は他者の苦しみを顧みることができず、自らの望むまま、他者を配慮して建設的な話しを行うことができません。

Ⅱ．敵対者に対する態度

ペトロは続けて、非キリスト者たちに対するキリスト者の態度を語ります（九節、参照・二章二三節、マタイ五章四四節、ローマ一二章一四～一八節）。聖書が語る結論は、主はキリスト者を通して、この世を罪・争いの世界から、和解と平和の世界へと導こうとされていると言うことです。

罪に対する復讐として戦争を行うこと、侮辱を受けたことに対する反撃を行うことは、罪が充満し、争いが継続されます。主は、そういう状況の中にあっても、キリスト者はいわば耐え、忍耐することを求め、和解・平和がもたらされることを望んでおられます。その延長線上に罪の悔い改めがあり、ここに最後の審判を遅らせておられる主の忍耐があります。

悪に報いず、侮辱にも言い返さないことは、私たちにとって忍耐がいることです。卑怯者、弱い人間と見られ、蔑まれることもあるかも知れません。しかし忍耐する時、衝突は回避され、相手に対して悔い改めの機会を与えることが可能となります。

キリスト者がそこまで忍耐することができるのは、すでに永遠の生命に与る救いが与えられているからです（参照・一章四節）。私たち自身が、罪の刑罰としての永遠の死から救い出され、永遠の生命と祝福を受けた者であるからこそ、私たち自身も他者の罪を赦し、祝福を祈ることができます。

Ⅲ．命を愛した行い

そしてペトロは、最後の一〇～一二節（詩編三四編一三～一七節の引用）で、八～九節において語ってきたキリスト者の態度の根拠を確認します。この詩編は、正しい者が絶えざる苦難の中にあって、神の御保護を信じ、委ねていることの幸福を歌った詩編です。キリスト者の目指している所は、永遠の生命・神の国における祝福であって、今の一時的な繁栄・権力を求めることではありません。私たちは土の器であり、私たちの口、内面的な所から出てくるものは、罪ばかりです。この土の器に、私たちは神の御言葉を蓄え、神の御言葉から引き出される柔和さ、しとやかさが求められています。これが「悪から遠ざかり、善を行い、平和を願って、これを追い求め」ることです。

「善い生活」　ペトロの手紙一　三章一三～一七節　　二〇〇八年五月二五日

Ⅰ．善いこと

ペトロは苦しみの中にあるキリスト者に対して、信仰を貫くための励ましの手紙を書いています。キリスト者である私たちが忘れてはならないことは、一つの心、つまり主によって与えられたゴールである神の国における祝福を求めることです。そして何よりも第一

に、心を一致させることです（八節）。その具体的な表れが、謙虚さ、隣人を同情し、憐れみ、兄弟を愛することです。

「善いことに熱心であるよう」（一三節）とあります。人に害を加えないような立派さは、一般道徳的に善い・立派な行いです。しかしそれだけでは足りません。聖書的に語れば、絶対善である神が唯一善い方であり、人が善い者になるためには、主からの言葉、律法（十戒）に従うことが求められます。これは十戒の第二の板（隣人を愛すること）のみならず、第一の板（神を愛すること）も求められます。隣人を愛することは、誰からも非難されることなく、むしろ賞賛される行為です。日本においても明治期や、戦後に教会が成長したのも、ある意味こうした倫理的に優れていたため人々から受け入れられたのであり、律法主義になってはなりませんが、非難されることではありません。しかしこれが、強制（〜ねばならない）となり、律法主義になる危険性もあります。私たちの置かれている立場、つまりすでにキリストの十字架による罪の赦しが与えられ、永遠の生命にあり、一つの目標に向かっていることを覚え、主の御業に感謝することが必要です。本当の意味で救いの感謝がなければ、「善いことに熱心である」ことは律法主義に陥ります。

Ⅱ．不正を暴くこと

しかし一方、現実にはキリスト者が善いことに熱心で義を貫く時、摩擦が生じることもあります。これは神を愛する故に、偶像崇拝を行わず皇帝を崇拝しないからであり、義を貫くことにより不正に富を蓄えようとする人たちの企てを邪魔することとなるからです。「義を貫く」ことは、「不正を暴く」ことでもあります。日本でも昨年、偽装が続きましたが、不正を暴くのは会社の従業員もしくは外部関係者です。そして従業員が会社を訴えることは、上司に逆らうことであり、覚悟が求められます。

しかし御言葉は、義を貫き、義のために苦しむのであれば、主による幸いを得、神の御国における喜びとなることを語ります。つまり私たちが、自らの身分・地位・安全を考え、不正に目をつぶることは、神の民として相応しくない事です。私たちキリスト者は、神の

国における栄光ある永遠の生命に生きる者として、主の義を貫くのです。自分自身の今日・明日のことを損得勘定するのであればできないことです。

Ⅲ．弁明が求められた時

私たちは、キリスト者として正義を貫くことにより、他人から否定されたり、不平を耳にしたりすることもあります（一五節）。その時、弁明が求められます。この時、私たちは自分で何かを語ろうと模索する必要はありません。主は御霊により、必要な言葉を備えてくださいます（マタイ一〇章一六〜二〇節）。主なる神は天地万物のすべてを支配しておられます。そして主の御計画の中に、今、私たちも置かれています。その目的地が、神の国です。主が私たちをそこまで導いてくださるからこそ、弁明が求められた時も、主が最も相応しい言葉をお与えくださいます。

また弁明が求められる時、私たちは感情的になってはなりません。「穏やかに、敬意をもって、正しい良心で」行うことが求められています。つまり、相手を負かすことを目的ではなく、主の義・真理を伝えることにより、相手が誤りに気が付き、悔い改める機会が与えられています。そうであれば、キリストに結ばれたあなたがたの善い生活をののしる者たちは、悪口を言ったことで恥じ入るようになります（一六節）。逮捕・虐げ・叱責が、不正であればある程、相手の側に今の状況を冷静に考えさせ、真理を見つめさせる時間が必要です。だからこそ私たちは感情的にならず、相手に対して不平不満を語ることなく、むしろ一度立ち止まり、すべての状況を見つめ直し、主の真理に基づいて、穏やかに敬意をもって語ることが求められています。また、主の霊に委ねて語るからこそ、私たちは攻撃するために構える必要もありません。むしろ信仰の武具を身に着ければ良いのです（エフェソ六章一一〜一八節）。

さらにペトロは、正しい良心で弁明することを求めます。良心の主は、主なる神のみであり、「正しい良心」によって弁明しようとすれば、主の御言葉に聞き従う必要があります。つまり、弁明が求められる時には、①主にすべてを委ねること、②感情的にならず、

相手に考えさせるように穏やかに敬意を持つこと、③主が教えておられる御言葉に従うことが求められています。

私たちは、主によりすでに罪が取り除かれ、義とされ、永遠の生命が約束されています。ゴールが与えられています。そこを見据えて、周囲の状況により善悪の基準を変えることなく、主の義を貫き、主を証しして行きたいものです。

「受苦に続く栄光」　ペトロの手紙一　三章一八～二二節　　二〇〇八年六月一日

Ⅰ．誤った解釈

今日、与えられた御言葉は、解釈の難しい聖書の一つです。森の中の一本の木だけを眺めていると道を誤ってしまいます。信仰とは、聖書のみによって神の御言葉を解釈するのですが、同時に聖書全体から解釈しなければなりません。聖書に矛盾はないからです。

今日の箇所は、キリストがノアの時代に洪水で死んだ者たちの所へ行き、悔い改めを説いたように解釈することもできます。時間的な整合性から、授肉する前のキリストであると語る者も、キリストが十字架の死を遂げた三日間に行ったとする者もあります。こうした解釈が、カトリック教会で煉獄を語る時の根拠となります。死者が悔い改め、回心することがあり得るとします。宗教改革を引き起こしたきっかけである免罪符は、直接的には旧約続編に関係しますが、ここの解釈も関係しています。

しかし主イエスがお語りになられた金持ちとラザロの話しによってこうしたことはあり得ないことが示されています（ルカ一六章一九～三一節）。死者がまだ生きている者に何かを語ったり、逆に生きている者が死んだ者に対してどうこうすることはできません。

Ⅱ．苦しむ者を救ってくださる主

では、今日与えられたペトロ書のテキストをどの様に解釈すれば良いでしょうか。キーとなるのは一八節と二二節です。キリストの十字架の苦しみと死、陰府下り、復活によってキリストを信じる者に救いが与えられました。このキリストの御業の救いは、キリストの十字架に立ち会った人たちばかりか、キリストの十字架以降の新約の教会に属する私たち、さらに天地創造から最後の裁判にいたるまで神によって集められたすべての神の民に、有効です。

キリストご自身がノアの時代の人々の所に赴いたのではありません。旧約の時代も、新約の時代である現代も、罪の中に人々は生きており、死に渡され捕らえられています。こうした罪の中に生きている者に、救い主である主を示し、主を受け入れ、信じるように導くのが「主の霊＝聖霊」の働きです。ロゴスであるキリストによって霊が遣わされました。それは旧約の時代も、新約の今も変わりありません。

だからこそ、十戒の序文において、「私はあなたの神、主であって、あなたをエジプトの地、奴隷の家から導き出した者である」（出エジプト二〇章二節）と告白する時、現在の私たちも、罪の奴隷の家に捕らえられていたが、主の救いの御業によって救い出されたことを、覚えることができます。

創世記六章には、罪に満ちた人間の姿が的確に表わされていました。人々は、主なる神を忘れ、自分勝手な生活を送っていました。そうした人々の様子を主は御覧になられ、忍耐して彼らの悔い改めを待っておられましたが、人々は罪を悔い改めることをしません。そして主は、罪の刑罰として、洪水において彼らを滅ぼそうされました。罪の刑罰は、死です。罪に生きる者は、主による裁きとしての滅びが定められています。彼らは「捕らわれていた霊たち」と語られ、ここにノアら家族八人も含まれていました。

しかし神の霊、キリストによって遣わされた霊は、ノアと家族八人を神の民として、悔い改めさせ、神に従い、箱舟を作成させ、救われます。あくまでも、キリストの贖罪に与るのはノアの家族八名で、それ以外の者が新たに救われることはありません。

罪の中、自我に満ちて、滅びに向かって歩んでいる人々の最中、ノアの家族も忍耐が求

められました。陸の上で箱舟を造り、人々から嘲笑され続けます。しかし主は洪水という裁きにより、彼らを救い出し、神の国に導き、祝福に満たしてくださいました。ノアの救いは、信仰故に迫害・苦しみにあるキリスト者に対する励ましです。

Ⅲ．神の子とされた者

そして、このノアらに関して、もう一つのことを確認しておきたいと思います。三章二〇～二一節「この箱舟に乗り込んだ数人、すなわち八人だけが水の中を通って救われました。この水で前もって表された洗礼は、今やイエス・キリストの復活によってあなたがたをも救うのです」。彼らはこの洪水により、主によって救われるのですが、それはいわば新約のキリスト者が水による洗礼に与るのと同じことだと語ります。

旧約の時代、割礼においてイスラエルの人々は主の民であることを確認していました。しかし罪の清めが求められることでは、新約の時代と同じです。そしてペトロは、ノアたちは、洪水による水が彼らの罪の清めであると語ります。洗礼に与ることにより最も大切なことは、神につながることです。神につながり、神の示された律法に従って歩む時、同時にキリストの十字架の御業による罪の赦しに与ります。洗礼そのものに罪の裁きの効力があるのではなく、主に結ばれ、キリストの贖罪に与ることにより、救いがもたらされるのです。

そしてノアたちは主に結ばれ、主の良心に従って主の御言葉に聞き従うことにより、キリストが着座しておられる天に上げられたのであり、私たちすでに主の洗礼に与り、神の子とされ、聖別されており、地上の苦しみにあっても、神の正しい良心に従い、信仰生活を送っていくように求められています。

「神の御心の従う」　ペトロの手紙一　四章一～六節　　二〇〇八年六月一五日

Ⅰ．キリストの御業による救いを忘れるな！

ペトロは三章八節以降、キリスト者の苦難について語ってきました。私たちキリスト者は、今なお神に背いたサタンの支配に服しているこの世で生活しています。そして様々な外的な苦しみ、目に見えない精神的な苦しみをこの世から受け続けます。しかし主は、キリストを信じ、キリストにあって神の御前に信仰的良心に従って生きるよう求められます。

しかしキリスト者が苦難に耐えなければならないのは、苦難に耐え、良き生活を送ることによる結果として、主による救いを獲得するためではありません。キリスト教は決して禁欲主義ではなく、殉教を賞賛しているわけでもありません。

私たちキリスト者は、すでにキリストの御業によって罪赦され救われています。苦難に耐え良き生活を行う根拠は、キリストの十字架にあります。すでにキリストが私たちに代わって十字架における罪の贖いを成し遂げて下さったからです（三章一八節）。

ペトロは改めて「キリストは肉に苦しみをお受けになりましたから、あなたがたも同じ心構えで武装しなさい」（四章一節）と語ります。なぜ苦しんでまで信仰を貫くべきなのか？信仰による苦難の故に信仰から離れる人もいます。しかしキリストがなぜ苦しみ、十字架に架けられ、死を遂げられたかを私たちは忘れてはなりません。キリストは十字架に死に、主の御前に生け贄として献げられました。主なる神は、ひとり子を死に引き渡すほどに、救いに与る私たちのことを愛していてくださいます。今も、主なる神は、聖霊をとおして私たちと共にいてくださいます。キリストの十字架の御業の故に、私たちの罪は償われました。そしてキリストが復活を遂げられることにより、死・サタンに打ち勝たれ、勝利をおさめてくださいました。キリストの勝利に与る者は、神の国における祝福に富んだ、永遠の生命が約束されています。

Ⅱ．神の国のリアリティ

しかし私たち人間は欲望に満ちており、他人のことよりも自分自身のことを考えます。人の痛み・苦しみが理解できません。そして自分自身にもたらされる苦しみを避けます。

三節では、性的な乱れ・酒・偶像崇拝の三種類の罪を語りますが、これらは代表的な罪に過ぎず、あらゆる罪が記されるべきです。隣人の痛みを顧みることなく行われる殺し、暴力、盗み、姦淫、貪り、偽証といった行為も忘れてはなりません。主の御前に私たちが立つ時、行い・言葉・心の中で十戒に記された律法から少しでも離れることはすべて罪です。

そしてペトロは「かつてあなたがたは、これらのことにふけっていたが、もうそれで十分です」と語ります。皮肉を込めた語り方です。キリストにつながれ改心した今も、罪がなくなったわけではありません。否。繰り返し私たちも罪を犯します。ペトロとしては、「もうこれ以上、罪の深みにはまらないように」との思いで、語っています。

罪があろうとも自己を満足させる生活は楽しいです。しかし主の御前に罪と言われることを繰り返して私たちに何が残るのでしょうか？　生活を破壊し、隣人を悲しめ、苦しめるだけです。そればかりか、罪の刑罰は死です。「自分の人生だから、好き勝手する」と言われる方もいますが、肉体の死によってすべてが終わるわけではありません。肉体は死を遂げても霊魂は生き続け、主の最後の審判により永遠の裁き・苦しみに入れられます。

主を信じ、キリストの十字架につながると、この永遠の死の苦しみから解放され、神の子として、神の国における永遠の祝福に満たされます。主はこうした生き方をキリスト者に望まれています。神の被造物である私たち人間は、神の御心に従って生きる時にこそ、真の幸福が約束されています。私たちは、神の永遠の祝福の希望に満たされなければ、この世的な罪から離れて、神の御言葉に従う良き生活を行うことなどできません。

Ⅲ．世との対峙が必要である！

キリスト者が、この世の罪から離れ、神の御言葉に従った歩みを始めた時、人々は誹（そし）ります（四章四節）。キリスト者として、私たちが体験していることです。主の日に主がお招きくださる礼拝に出席することも然りです。仏式の葬儀に参列が求められる時、焼香をしないことも然りです。こうした信仰上の一つ一つが信仰の戦いとなります。特に日本人は、周囲に合わせることを求めます。キリスト者として、周囲の人たちと異な

ることを行えば、目立ち、それ故に裏口を叩かれたり、色眼鏡で見られたり、そしりの原因となります。そしてそれが発展していくと、いじめ、迫害・暴力に訴えることも生じてきます。

信仰から生じるこの世の人々との対立を、私たちは避けたり、逃げてはなりません。私たちはすでにキリストの苦しみによって、罪の刑罰から既に解放されています。世にある束縛から自由にされています。私たちはこの後、聖餐式に与ります。救いのリアリティーをこの聖餐式によって覚えていただきたいのです。黙示録（七章等）で語られている神の国における聖徒・キリスト者の喜びを覚えていただきたいのです。神の国に罪も苦しみもありません。神の国においては、罪・サタンはすでに滅ぼされ、キリストが勝利を治められています。そして神の祝福の下、永遠の喜びに満ち溢れています。主が私たちにこれらの祝福をお与え下さっているのに、どうして永遠の滅びと苦しみの道を歩もうとしている人々と同じ道を歩むことができますか。できるわけがありません。信仰の戦いを行い、肉において苦しむことは大変困難な歩みです。しかし私たちは、主がお与え下さろうとしている祝福を覚える時、困難な歩みを乗り越えて、信仰を全うすることができます。

「今、行うべきこと」　ペトロの手紙一　四章七～一一節　　二〇〇八年六月二二日

Ⅰ．万物の終わり

ペトロは、「万物の終わりが迫っています」（七節）と語ります。主イエスは「然り、わたしはすぐに来る」（黙示録二二章二〇節）と仰せになり、教会はこの主の約束に対して「アーメン、主イエスよ、来てください」と答えます。主イエスが再臨され、最後の審判の後、新天新地が与えられ、教会が聖められ、主イエス・キリストの花嫁として、永遠の全き祝福に向かい入れられる日を、私たちは待ち望んでいます。苦しみの中にあるキリ

スト者に対して、忍耐をもって耐え忍ぶように語るのは、この希望の故です。

しかしこの時からすでに二〇〇〇年経ちました。いつこの日が来るのか？遅いではないかと言われます。しかし私たちの人生は、長くても一〇〇年程です。人の物差しで、神の御業を計ってはなりません。主なる神は永遠のお方です。「一日は千年のようで、千年は一日のようです」（Ⅱペトロ三章八節）。主なる神は、空間的には無限、時間的には永遠、そして不変の霊です。神の恵み豊かな御業を私たちの次元に閉じこめてはなりません。その日は、定められており、近づいていることは確かです。しかし、私たちにはその日は示されていません（マタイ二四章三六、四二節）。私たちは、主の御言葉を信じて、その日の備えることが求められています。

Ⅱ．主に祈りなさい

ではどのような備えを行うのでしょうか？　①私たちを救いに導く主なる神に全面的に信頼し委ねて祈ることと、②隣人を愛して助け合うことです。

第一に祈ることです。そのために、私たちは主の御前に立つ自分自身の存在を知るべきです。科学技術が発展し、インターネット、携帯、テレビ……、人間は快適に生きることができ、人は何でも適うように思っています。しかしそれは上辺だけであり、ほとんどの人が中身を知りません。そのため故障しても、自分では修理すらできません。知識を蓄えているようであっても、世界のごく一部に過ぎません。私たちは、自らがちっぽけな人間に過ぎないことを知るべきです。その一方、世界各国、日本の各地で発生している自然災害に、主の御力を顧みるべきです。自然を通して働かれる神の御力を忘れた人間に対する警告です。

そのために主に対する全面的な信頼をもって祈ることが求められています。心と身体の両面において主に従う必要があります。「思慮深く」とは、「正しい感覚を保って・自己制御して」と言った意味です。つまり神に祈り求める時に、ただ熱心に信じて祈れば良いのではなく、自分の置かれた場所・立場・状況を冷静に判断し、何が求められ、何を

行うべきかを客観的に判断しつつ、主に祈り求めることが求められています。感情的な祈りは、主の求めておられることではありません。身を慎むことにおいては、自分の願いではなく、主の求めておられることを冷静に聞く、謙遜さが求められています。

Ⅲ．互いに愛し合う

一方で、主は心を込めて愛し合うことを求めます。人は、迫害あるいは苦しみの中にある時、余裕がなくなり、主を忘れ、自分のことで精一杯になります。そして小さなことでも他人に対して不平・不満を語り、仲違いしたりします。しかし祈りは、まさに余裕のない・焦りの中で生活する私たちに、心のゆとりをもたらします。そして主の御前に祈り求める時、同時に周囲にいる他人のことをも配慮し、見渡すことができるようになります。

続けてペトロは「愛は多くの罪を覆うからです」と語ります。心に少しでも余裕があれば、少々の事でも、罪を覆い尽くし、赦すことができます。確かに人は、罪の故に傷つけられると、憤りたくなり、心が定まらなくなります。しかし私たちはすでにキリストの十字架による罪の赦しが与えられた者として、人の罪をも赦すことが求められています。また最終的には他人の罪を、キリストによる最後の裁判に委ねるべきです（参照・仲間を赦さない家来のたとえ　マタイ一八章二三～三五節）。

Ⅳ．人に仕えよ！

そして他人の罪を赦すことができる者は、人をもてなすことができます。それも「不平を言わずに」です。私たちは不平不満・つぶやき・愚痴を、すぐに口に出してしまいますが、それらは究極的には神に対する不平・不満であり、主によって与えられている救いに与る者としてのふさわしい行為ではありません。

そして、どのようなもてなしかと言えば、主なる神によって与えられた霊的賜物、つまり主によって与えられた様々な働きをとおして行うことが求められています（一〇節）。それは、自らの特技を人々に見せびらかせるためではありません。自己満足のためでもありません。主は、それぞれに異なった賜物をお与えくださり、互いにそれらを持ち寄り、

助け合うことにより、教会を建て上げ、秩序を保つことを求めておられます（参照・Ｉコリント一二章）。それぞれが異なった働きを行うからこそ、一つのキリストの体としての働きを全うすることができます。不必要な器官は何一つありません。互いに協力し合い、秩序正しく働くことにより、キリストの体を形成します。キリストの体を形成していくことこそ、今、私たちに求められています。

「キリストと共に歩む」ペトロの手紙一　四章一二～一九節　　二〇〇八年六月二九日

Ⅰ．キリストの十字架を覚えよ！

ペトロは苦難の中、信仰の戦いが強いられている各地の教会の民に、励ましの手紙を記しています。ペトロは前節（四章一一節）で、主への栄光を語り、ここで手紙を書き終えるような形を取りますが、なおも一二節以降、励ましの手紙を続けます。神学者によっては「別の手紙である」と語る人たちもいますが、彼らの苦しみを覚えつつ、書き足しているようです。

私たちは、苦しくなると、そこから逃れたいと思うのが常です。自分から進んで苦しみに入る人はいません。しかしペトロは苦しみを「喜びなさい」と語ります（一三節）。キリスト者は、信仰の故に苦しみの中に置かれた時、私たちを救いに導いて下さった救い主イエス・キリストの十字架の姿を思い覚えるべきです（参照・ルカ二二章六三節、二三章一一節、二三章三五～三九節）。キリストご自身は、律法を全うされたお方ですが、私たちの罪を背負って十字架に架けられ、苦しまれ、死を遂げられました。私たちが自分では負いきれなかった十字架をキリストが担って下さったため、私たちは十字架を背負う必要がなくなりました。私たちははキリストが背負われた十字架の苦しみを担うことができません。だからこそ私たちは、苦しい時にキリストの十字架の苦しみを覚えるべきです。そ

してキリストへの信仰の故に、苦しみにあるのであれば、不平を語り逃げだそうとする前に、キリストが担って下さった十字架に感謝すべきです。私たちの背負う十字架・苦難は、非常に軽くされており、さらに救い主である主が共にいてくださるからこそ、弱い私たちが担いきれないような苦しみが私たちに与えられることはありません（Ｉコリント一〇章一三節）。

Ⅱ．罪を行わず、社会を形成せよ！

既に罪が赦された者として、もうこれ以上、罪を積み上げてはなりません（一五節）。むしろ社会を形成していくことが求められています。もちろん、既に救いに与ったキリスト者は、地上の生涯の間、なおも罪人です。罪を犯してしまいます。故意に行わないだけです。罪を犯した時には、主の御前で罪を悔い改めることが求められます。主の御前に、罪人であること・誘惑に弱い人間であることを、主の御前に告白すべきです。むしろ自分は、「神の御前で一切罪を犯すことなどない」と語ることこそ傲慢です。

プロテスタント教会は、カトリック教会のように「懺悔・悔悛」を義務づけるようなことはしません。しかし罪を顧みて、悔い改めることが求められています。ヤコブは「だから、主にいやしていただくために、罪を告白し合い、互いのために祈りなさい」（ヤコブ五章一六節）と語り、カトリック教会は神父の前で悔悛しなければならないことを定めましたが、告白し合う相手は、教職者でなくても個人的に親しい者でも、家族でも良いのです。私たちに必要なことは、「罪を告白し合う」ことではなく、「互いのために祈ること」です。主は、その悔い改めを受け入れ、罪を赦してくださいます。

私たちは、人の前で罪を告白する前に、日頃から主の御前に立つ度（礼拝、家庭礼拝、個人礼拝）に、主の律法に照らして自らの罪を顧みるべきです。特に主の晩餐に与る時、罪深い者であってもキリストの十字架によって罪が赦されていることに感謝して、罪を悔い改めて主の晩餐に与るのであり、同時にもう罪を繰り返さない決意を行うことです。

さて「悪者」（一五節）は魔術師のことです。また注目すべき言葉「他人に干渉する

者」は、「人殺し、泥棒、悪者」と比べて次元の異なることのようです。「他人」と「監督者」を合成した複合語で「他人の家庭に入り込み、批判・混乱させる」ことです。キリスト者は、他人に無干渉であってはなりませんが、個人を尊重し、個人の確立も求められています。つまり、罪とされることを行わないことはもちろんのことですが、社会を形成していく役割も担わされています。自由は無秩序であってはなりません。秩序が保たれた上で、互いに個人が尊重されるべきです。キリスト者は、このように積極的に社会を形成していくことが求められています。

Ⅲ．神の御国を見据えた歩み

不信心な人、罪深い人、彼らは、今、苦しみを避け、日々楽しんでいるようですが、主の裁きを逃れることはできません。永遠の苦しみが待っています。

一方、主を信じ、主が求められる社会を形成しようとする時、社会との軋轢も避けられず、衝突が生じます。私たちは、そのような自らが苦しみの中に置かれた時、消極的になってしまいます。しかし私たちはその現状を見つめるべきです。目的と終着点を見つめるべきです。今、信仰の故に苦しみの中にあり、それが続くとしても、私たちキリスト者は、これ以上の苦しみに遭うことはありません。キリストの十字架の故に罪が赦され、神の国における永遠の祝福が与えられているからです（四章一六～一九節）。

こうしたことを覚える時、私たちは、キリストの十字架によって与えられた祝福を覚え、主に仕え、主の御言葉に聞き従って歩み続けることができます。

「上に立つ長老へ」ペトロの手紙一　五章一～四節　　二〇〇八年七月六日

Ⅰ．ペトロ

さてペトロは長老に語りかけるにあたり、「わたしは長老の一人として」と語ります。

ペトロは、主イエスの苦難と復活の証人として、主イエスから直接、使徒として召されました。ですからここで「長老の一人」であると語るこの手紙の著者は使徒ペトロではなく、別のペトロだとも言われます。それは、手紙全体の文体が流ちょうなギリシャ語で記され、漁師であったペトロにはこれだけの文書が書けなかったのではないかとされるからです。しかし使徒の働きの一つに「長老」もあります。このことは、教師（牧師）の働きとして監督、牧師、しもべ、長老、使者、伝道者、説教者、教師、神の奥義の管理者と呼ばれ（政治基準第四三条）多彩であることと同様です。

つまりペトロは使徒として上に立つことなく、主から召された一人のしもべとして、信仰歴の浅い兄弟姉妹に対して、いわゆる先輩の信仰者から後輩に対して語っています。このことは「復活の証人」と語らずに、「キリストの受難の証人」と語ることにも現れています。これは彼が三度主イエスを否定した不信仰の証しとも言えます。しかしこの不信仰なペトロであっても、キリストは彼を使徒として召し、「わたしの羊を飼いなさい」（ヨハネ二一章一七節）とお語りくださいました。ペトロは、立派な者だから語るのではなく、キリストの恵みによって自らが罪赦され、生かされている者として、語るのです。

Ⅱ．長老の努め

ではなぜペトロは長老たちに語りかけるのか。教会は、キリストを信じるが故に迫害を受けております。一人ひとりの信徒は信仰を守りとおすことで必死です。教会の存続の危機です。そうした中、信徒の信仰を守り、教会形成していくために、長老の働きは大切です。ただここで言う「長老」とは、治める長老（治会長老）と共に、御言葉を語る長老である牧師も含まれています。

長老の最も重要な努めは、「あなたがたに委ねられている、神の羊の群れを牧」することです。「牧する」とは、毎日羊に食物を与え、牧場に集めて養い飼い、群れを監督して安全を守ることです（参照・詩編二三編）。つまり長老の働きとは、すべての群れに気を配ることです。そのため長老は、信仰的な経験が豊かであり、御言葉に立った分別があり、

試練に耐えた信仰生活を送っている人でなければなりません。ですから長老は自ら進んで始めることではなく、キリストからの召し、教会員からの合意があって、初めて、長老となることが可能です。

一方、キリスト者は大牧者なるキリストの羊であり、キリストの十字架の血により贖われ、キリストの御言葉によって養われています。キリストは今、天上にあってその働きをなしてくださいます。長老は、キリストによってその働きに就いています。民を養うのは、主による救いの確かさ（御言葉の解き明かし、純粋な教理、信仰告白）によってです。もちろん、霊的・信仰的なことばかりか、生活に問題がある時には、話しを聞き、共に祈り、必要な対処をすることが求められます。

いわば長老は、教会における扇の要であり、御言葉により信徒を一つの思い、つまり神の国に導き希望を持つことができるように養う働きが求められています。

Ⅲ．長老の原則

その上で、ペトロは長老としての三つの原則を語ります。「強制されてではなく」、「卑しい利得のためにではなく」、「権威を振り回してもいけ」ません。

①最近は、伝道の低調と共に、どこの教会においても長老・執事のなり手が少なくなりました。それは若い人たちが減っていることもありますが、同時に信仰の問題もあります。牧師と異なり、長老や執事は、仕事を持っています。特に近年は労働条件が厳しく、多くの教会員が、教会の奉仕にまで時間と労力を十分割くことができません。そのため会員総会において長老や執事に選出されても、辞退する人たちが出てきます。

しかし、主なる神による本当の救いの喜びが与えられている時、苦しくとも教会の働きのために時間を割き、喜んで主の働きに仕えていくことができます。つまりキリストの十字架と、それに伴う祝福・希望と喜びの伴う信仰の問題です。つまり苦難の中にも、希望があるからこそ、苦難に耐え、主に仕えていくことができます。

②報酬や見返りを求めないことです。地上の朽ち果てるものではなく、私たちは永遠に

朽ち果てることのない祝福を主から頂いていることの理解が求められます（参照・一章三～四節）。

③人は役職が付くと、自らを誤解しがちです。これがローマ法王や韓国の教会の牧師・長老のように、社会的地位が確立されていればなおさらです。しかしペトロ自身、使徒として誇ることなく、自らの罪を顧み、悔い改めることにより模範を示しています。

Ⅳ．まとめ

ペトロがこのように語ることができたのは、キリストの約束の希望が揺るぎないからです（四節）。主は、ペトロを愛し、罪を赦し、救いの希望に入れられたように、私たちも同じように愛し、罪を赦し、救いの希望に入れてくださっています。だからこそ、ペトロが、神に従い、自ら進んで奉仕し、献身的になり、群れの模範となり、長老たちに勧めているように、私たちも主の民として、主の求めに相応しい歩みを行うことが求めれています。

「若い人たちへ」ペトロの手紙一　五章五～七節　　二〇〇八年七月一三日

Ⅰ．若い人たち

今日の説教題は「若い人たちへ」です。正直、今日の説教をどのように語ろうか、非常に考えました。韓国では儒教の影響がまだ残っており年長者が敬われますが、今の時代、日本では以前に比べて年長者を敬うことが非常にないがしろになっています。その原因として、学校教育、地域社会、社会全体の動向など様々なことが挙げられますが、誤った個人主義により周囲を顧みない人々が増えていることも一因です。

しかし、ペトロは「若い人たち、長老に従いなさい。皆互いに謙遜を身につけなさい」と語ります。これは、社会の状況は違えども、聖書の時代も現代と同様に、年長者を敬う

ことなく、自己中心の若い人たちが多くいたことを物語っています。

人は若い時、希望があり、可能性があります。そのため人生経験を積み上げてきた年長者の語る言葉よりも、自らの望みに向かって駆け出します。型破りの行動ができるのも、若さの象徴です。マンネリ化、硬直化、腐敗が始まった社会には、そうした型破りな若い力が求められます。ですから無制限にとは言いませんが、私は若い人たち、子どもたちが型破りな行動があっても、私は良いかと思っています。

しかし、無制限であってはなりません。社会の中に置かれた自らの立場を考慮する必要があります。そしてキリスト教会の場合、主によって救いが与えられたキリスト者として、主のお語りになる御言葉に聞き従うことを行った上で、新たな行動が求められます。ですから型破りであっても構わないわけですが、主の御言葉に従って、年長者に対しても理解を求めることが必要です。

Ⅱ．主の御前に生きる

ペトロが長老に従うよう求める時に念頭にあるのは十戒の第五戒「あなたの父と母を敬え」です。この第五戒の解説として、ウェストミンスター大教理問答問一二四は次のとおり語ります。「第五戒では、「父母」という語によって、ただ単に本来の両親だけでなく、すべて年齢と賜物において目上の人、特に、家族・教会・国家のいずれにおいてであれ、神の定めにより、わたしたちの上に、権威ある立場に置かれている人々、のことが言われています」。聖書は、人が、父母、年長者、そして長老に従うことを一貫して語ります。年長者の人生経験から語られる言葉には、裏付けがあり、そこに真理があるからです。また教会（神の国）の共同体において、一致を保つ必要があるからです。

しかしどうしても人は、自己中心。傲慢になります。他人の語る言葉に耳を傾けることができません。これが私たちの姿です。日々の生活に私たちの信仰も表れます。キリストはこの世に遣わされ、地上での生涯律法を全うし、十字架を歩まれました。これにより私たちの罪は赦され、永遠の死、永遠の裁きを逃れるものとされました。ここに主に従う信

仰が生じます。そして聖書を読み、御言葉には耳を傾けながらも、人の話しは聞かない自分がここにいます。未熟な信仰がここにあります。

主イエスは、金持ちの青年（マタイ一九章一六～二二節）が、律法に従いつつ、その信仰が歪んでおり自分よがり・自己中心的になっていることを指摘し、隣人を愛するために「持ち物を売り払い、貧しい人々に施しなさい」（一九章二一節）とお語りになりました。真に神の救いに与るキリスト者は、神に従うように隣人の痛みを共有し、それと同時に御言葉に耳を傾けます。

クリスチャンに対する様々な誘惑がある中、主は、主の御言葉に聞き従うように、長老たちに従うよう求めます。ペトロは長老に対しては、「神に従って、自ら進んで世話をしなさい」、「卑しい利得のためではなく献身的にしなさい」、「権威をひり回さず、群れの模範になりなさい」と語ります。ですからペトロが「若い人たち、長老に従いなさい」と語る時、長老たち・年長者たちが、群れの模範となり、教会の形成のために主に仕えていることを前提として語っており、若い人たちに対して語りかけるペトロの言葉の裏側には、年長者たちがさらに主に仕えることを求めています。

その一方、若い者は謙遜さを持ち、自分を低くすることが求められます。水は高いところから低いところにしか流れないように、神の御前に立つ時、人の前に立つ時、自らを低くし謙虚にならなければ、決して神の御言葉も、人の話も聞くことなどできません。

ペトロは一言付け加えています。「神の力強い御手の下で」。つまり、私たちが日々の生活の中で、傲慢になり、人の話しが聞けない時、実は、神の御手の外、神を忘れて生きていると語ります。ウェストミンスター小教理問答問一では「人間の第一の目的は、神に栄光を帰し、永遠に神を喜びとすることです」と語ります（参照・Ⅰコリント一〇章三一節「だから、あなたがたは食べるにしろ飲むにしろ、何をするにしても、すべて神の栄光を現すためにしなさい」）。つまり、私たちは、常に主なる神を覚え、生かされ、救われていることの感謝と喜びを持つことが求められています。そうすれば、救い主である主の

御言葉に聞き続けることができ、さらに主によって遣わされた長老・年長者の声にも耳を傾けることができるからです。神を愛する者は、隣人をも愛することができます。

Ⅲ．すべてを神に委ねて生きる

常に主なる神が共にいてくださるから、いつでもどこでも、主なる神に祈り求めることができます。だからこそペトロは「思い煩いは、何もかも神にお任せしなさい」と語ります。私たちを生かし、救いに導いてくださる主なる神は、いつも私たちを心にかけてくださり、天において執り成しの祈りを行い続けてくださいます。

「世に潜む悪魔」ペトロの手紙一　五章八～一一節　　二〇〇八年七月二〇日

Ⅰ．悪魔の企て

今年になり、振込詐欺がまた増加しています。日々、巧妙になり、気をつけていても騙される人たちが後を絶ちません。そのため私たちは予防が必要です。このように騙され経済的な損失を負うことは、私たちの生活にとっては非常に大きな痛手です。

しかし私たちは、同様に信仰に対する誘惑への予防措置をとっているでしょうか？　悪魔はキリスト者を日々狙っています（八節）。詐欺の被害は私たちの生活を変え、殺人では私たちの命の問題となります。悪魔による攻撃は、そのいずれもに関わることであり、またさらに私たちの人生、私たちの命そのものに関わる事柄でもあります。

だからこそ、ペトロは「身を慎んで目を覚ましていなさい」と語ります。ペトロ自身が主イエスから語られた言葉でもあります。主イエスは十字架に架けられる前の夜、ゲツセマネにおいて祈られる時、ペトロら三人を連れ行かれました（マタイ二六章）。主イエスが祈っている間に、弟子たちは肉体の弱さの故に眠ります。その時、主イエスは「わたしは死ぬばかりに悲しい。ここを離れず、わたしと共に目を覚ましていなさい」（三八節）、

「あなたがたはこのように、わずか一時もわたしと共に目を覚ましていられなかったのか。誘惑に陥らぬよう、目を覚まして祈っていなさい。心は燃えても、肉体は弱い」（四〇～四一節）とお語りになりました。この主イエスの言葉は、ペトロら弟子たちの肉体の弱さと共に、霊的・信仰的な弱さを指摘しています。ペトロはこの直前、主イエスに対して「たとえ、みんながあなたにつまずいても、わたしは決してつまづきません」（二六章三三節）と語っていたのですが、ペトロは主イエスが逮捕されてから、三度「イエスを知らない」と語り罪を犯したのです。つまりペトロが「目を覚ましていなさい」と語る時、自らの失敗を心に秘めつつ、語っています。そして神を信じて、すべてを神に委ねているからと言って、目を覚ましていることにはなりません。私たちも神を信じているからと安心していてはなりません。何も考えない無為、怠慢になってはなりません。むしろ社会に対して、どこに罠が仕込まれ、どこに罪が潜んでいるか、私たちはしっかり目を光らせておく必要があります。

Ⅱ．信仰の武具を身につける

しかし悪魔は、様々な方法で私たちを主なる神から切り離そうと狙っています。それは直接的な迫害ばかりでなく、試練をとおし信仰から離れさせようとします。あるいは、真の救いに代わる楽しみに目をくらませ、信仰から離れさせます。サタンは、私たち人間の欲望、快楽に訴えます。そのためペトロは「信仰にしっかり踏みとどまって、悪魔に抵抗しなさい」と語ります。パウロの言葉を用いれば、「神の武具を身に着け」ることです（エフェソ六章一〇～一八節）。つまりペトロが「目を覚ましていなさい」と語る時、私たちは、神を信じ、神に全面的に信頼することが求められています。ペトロの失敗も「自分は大丈夫だ」、「信仰を貫き通す自身がある」と思っていた所に落とし穴がありました。

私たちは主イエス・キリストによる救いを信じています。私たちは一人ではありません。主が私たちと共にいてくださいます。そして主は私たちに御言葉をお語りくださいます。だからこそ、私たちは、主に委ね、主を信じ続けようとする時、主の御前に立ち、主の御

声に聞かなければなりません。私たちは振込詐欺に対して、知識を身に着け、日頃から注意しているからこそ被害に遭わなくて済むのであり、それと同様に私たちを救いに導き、神の民としてサタンの誘惑から逃れる術を主は御言葉を通して私たちにお教えくださいます。だからこそ私たちは、主の御言葉に聞きつつ、日々の出来事一つひとつにサタンの誘惑・罪への誘いがないかを警戒することにより、信仰から離れることから守られます。

一方、サタンからの誘惑に遭い、苦しみの中にある時、「なぜ自分だけがこのように苦しまなければならないのか」と思います。被害妄想、悲劇のヒーロー・ヒロインと化します。しかし、大なり小なり、主によって選ばれた信仰者は、悪魔による誘惑に陥ります（九節）。神を信じる故に苦しみを覚えることは、神の民であるキリスト者が背負わなければならない十字架です。

Ⅲ．永遠の希望

私たちは、十字架なんか背負えない・背負いたくないと思います。しかし私たちは、主がお与え下さった救いの恵み、永遠の生命の恵みを忘れてはなりません（五章一〇～一一節）。

ペトロは「あらゆる恵みの源である神」と語ります。私たちの生活に必要として与えられている恵み、目に見えない救いの平安、喜び、将来的な希望は、すべて主によって与えられ、備えられています。この方がサタンに誘惑することもお許しになっており（参照・ヨブ一章、二章）、誘惑は、主がこの世における苦しみが神の子として相応しい者となるための信仰の養いとして私たちに備えられます。これが私たちに強いられた十字架であり、試練です。私たちは、主のお許しがなければ、何一つ恵みも祝福も得ることはできません。

主は、神を信じる私たちを永遠の栄光へと招いてくださいます。地上の苦しみを超えた所にある栄光であり、地上の苦しみは過ぎ去ります。キリストが十字架で罪に対して勝利を遂げてくださいました。キリストによる勝利が与えられているからこそ、私たちは永遠の希望を持って、日々、信仰生活を送り続けることができます。だからこそ私たちは、霊

的に目を覚まし、主により頼みつつ、永遠の希望を持ち続けて歩み続けていくことが求められています。

「平和があるように」ペトロの手紙一　五章一二～一四節　　二〇〇八年七月二七日

Ⅰ．主なる神による励ましの書簡

使徒ペトロは、試練の中、信仰の戦いを送っているガリラヤやアジアの諸教会に対して、試練の向こうにある救いの喜びを覚えつつ、励ましの手紙を書き送っています。そしてペトロは「これこそ神のまことの恵みである」と語ります。つまりこの手紙は、ペトロが個人的に書き送っているのではなく、ペトロをとおして主なる神ご自身が、信者たちを励まし、救いの希望をお語りくださっている神の御言葉です。主なる神が生きて働かれ、苦しみの中にある者を励まし力づけてくださる神の愛を、私たちは忘れてはなりません。

Ⅱ．シルワノ

さらにペトロは、忠実な兄弟と認めているシルワノによって手紙を書き記したことを語ります。当時は代理の者が手紙を書き記すことがあり、最後の一文はペトロのシルワノに対する感謝の意味が込められています。このことは、流暢なギリシャ語で記されている文体が、ペトロ自身によってではなくシルワノによって整えられたことを語り、「ヘブライ語を話すペトロには書けない」と言った疑義を払拭しています。

シルワノは、使徒言行録一五章二二節ではシラスと呼ばれており、エルサレム教会の指導者でした。使徒一五章のエルサレム会議では、異邦人キリスト者が割礼を受けなければならないかが議論され、結果として割礼を受けなくても構わないことが決議され、異邦人伝道に歩み始めた新約の教会として、非常に重要な決定がなされます。この会議の決定事項を、シルワノはパウロやバルナバと共に、アンティオキアに報告する重要な任務を担い

ました。つまりシルワノは教会の人々に非常に信頼されている指導者でもありました。

Ⅲ．信仰に踏みとどまる

また「神のまことの恵み」、つまり福音の中心的な事柄を私たちは忘れてはなりません。それは神の御子であるイエス・キリストが、人としてこの世に来られ、私たちに代わって十字架の苦しみを担われたことです。本来、私たちは、行いにおいても、口から発せられる言葉においても、心の中においても、主の御前に罪人であり、それ故に肉の生涯が終わること、また最後の審判と共に、永遠の死に宣告されていました。

しかし神を信じる私たちの罪は、キリストの十字架に転嫁され、主を信じる私たちの罪は贖われました。そして、キリストの十字架の御業の故に、私たちは義とされ、子とされ、神の祝福に満たされ、永遠の生命が与えられます。だからこそ、キリストの十字架を受け入れ、信仰の道に入ったキリスト者は、地上の歩みにおいて、信仰の故に、様々な試練、迫害にあっても、地上の生涯が一時のことであり、主によって与えられる永遠の神の御国における祝福が与えられる喜びを覚えつつ、地上の生涯も送ることができます。だからこそペトロは「この恵みにしっかりと踏みとどまりなさい」と語ります。

しかし現実に、信仰に踏みとどまることがどれだけ厳しいものであるのか、私たちは信仰生活を通して示されています。①信仰が故に試練を避けることができません。また実際に試練の最中、私たちはその試練から早く逃れたいと思います。キリストの十字架を信じているが故に、迫害され、試練にある時、試練から逃れるために信じることを止めることも一つの手段と考えてしまいます。②偶像崇拝は、戦時中の日本の教会に多く見られた事ですが、神への信仰は保っていても、迫害から逃れるために、取り繕い、主が求めておられる「あなたは何者をも神としてはならない」とする第一戒の戒めを破り、第二戒に禁じられている偶像礼拝すら行うことすらあります。こうした行為は、旧約聖書におけるイスラエルが繰り返し罪を犯し、主によって咎められていた行為そのものです。③世俗化・この世にある様々な娯楽という誘惑に負け、信仰をゆがめ、さらに信仰から離れることも、

教会における大きな問題です。

ですから、「この恵みにしっかり踏みとどまる」ことが求められる時、私たちは、自らの罪の大きさが示され、その罪に対して「神のまことの恵みである」キリストの十字架による救いがはっきりと示されていなければ、信仰は弱まり、試練や誘惑に遭遇すれば、信仰から離れる事態を招きます。だからこそ、私たちはどのような時にも、両手・両足に釘が打ち付けられ、私たちに代わって苦しみつつ死を遂げられたキリストの十字架から目を逸らせてはなりません。

Ⅳ．愛の口づけと主による平和

ペトロは「愛の口づけによって互いに挨拶を交わしなさい」（一四節）と語ります。これはキリスト者同士、聖徒の交わりです。同じ信仰の戦いを行い、同じ救いの目標を持っている者として、互いに愛し合い、苦しみを分かち合う交わりです。「口づけ」は、愛と善意の表現であって、神の家族としての一体感を強く表している表現です。しかし、こうした行為は、誤解されるため、教会の中で実際に愛の口づけは現在においては行われません。

それよりもむしろ、信仰による試練を分かち合いつつ、神の子とされ、神の国の住民として、一つのゴールに向かって歩む者としての兄弟姉妹として、聖徒としての交わりを深めることが、キリストの教会に求められています。

そしてペトロは最後に「キリストと結ばれているあなたがた一同に、平和があるように」と語ります。平和・平安は、ヘブライ語の「シャローム」です。主なる神によって神のまことの恵み、キリストの十字架による救いが与えられた者は、すでに与えられている救いの喜びと感謝があるからこそ、どのような試練・艱難・誘惑の中にあっても、信仰から離れることなく、平安に、シャロームに歩み続けていくことができます。